(1) 小学校教員養成課程 国語科コアカリキュラム解説

[1] 国語科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校国語科における教育目標、育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに、児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

国語科の指導法は、小学校における国語科の教育目標、育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに、児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「小学校国語科の教育目標や指導内容」「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」）、「授業実践」（「指導技術」「授業づくり」）の2つからなる。学習形態は、講義（小集団でのディスカッションなどを含む）に留まることなく「授業観察」、「模擬授業」などを通して小学校の実際の国語科の授業の実態について知るとともに、児童の立場で授業を体験したり教師の立場で模擬授業を行ったりすることを通して、理論に裏打ちされた実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

「小学校国語科の教育目標や指導内容」及び「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」に関する知識を学ぶ。ともに国語科の授業の土台となる知識であり、これらをもとに実践力を身に付けることが重要である。

(1) 小学校国語科の教育目標や指導内容

小学校国語科教育について、小学校国語科の意義と国語科観の変遷、小学校国語科学習指導要領の構造と内容、育もうとする資質・能力である小学校国語科の各分野・領域（「知識及び技能」・「思考力、判断力、表現力等（「話すこと・聞くこと領域」「書くこと領域」「読むこと領域）」）における教育目標、指導内容、評価の観点、小学校国語科の背景となっている関連諸学問や領域、言語・文化・社会の変化や児童の言葉の発達や多様性等の各項目に関する知識を扱う。

◇一般目標

小学校学習指導要領に示された小学校国語科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校国語科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校国語科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:日常生活や学習活動において必要な言葉の力の基礎を計画的に学ぶ場が小学校国語科である。そのいわゆる基礎教科としての意義について深く理解するとともに、今日の小学校国語科の位置付けを正確に理解するために、日本の小学校における国語科観がどのように成立・変遷してきたかについて、特に戦後の小学校学習指導要領（国語）の変遷に重点を置いて学ぶ。

②小学校学習指導要領(国語)

到達目標:学習指導要領における小学校国語科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。

解説:小学校学習指導要領（国語）の全体構造、すなわち「目標」、「各学年の目標及び内容」、「指導計画の作成と内容の取扱い」、「学年別漢字配当表」といった形式的な構成、また、各学年の「目標」の構成や「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等（話すこと・聞くこと）」「書くこと」「読むこと」といった「内容」の構成について把握する中で、小学校学習指導要領（国語）の「目標」と主な「内容」について、概要を説明できる程度に理解する。

③小学校国語科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容

到達目標:各校種等の連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校国語科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を理解している。

解説:幼稚園・保育園の保育内容（言葉）領域や中学校・高等学校の国語科と関連させながら、「知識及び理解」（言葉の特徴や使い方）「情報の扱い方」「我が国の言語文化）」「思考力、判断力、表現力等」（話すこと・聞くこと）「書くこと」「読むこと」における教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容について、どのような目標を設定すればよいか、どのような資質・能力の育成に向けて、どのような指導内容を、どのような教材や言語活動を使って指導していけばよいかについて理解する。

④小学校国語科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校国語科の背景となる関連諸学問や領域（文学研究、日本語学、書道、コミュニケーション学など）との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:国語科の背景となっている関連諸学問や領域（文学研究、日本語学、書道、コミュニケーション学など）についてその概要を知り、国語科教育との関連への基礎的理解に基づいて、小学校国語科の指導内容を構造的に理解するように導く。

⑤言語・文化・社会の変化や児童の実態

到達目標:小学校国語科の内容を指導する際に留意すべき、言語に関わる社会・文化の変化や児童の実態などの点について、基礎的な事柄を理解している。

解説:SNSなどの登場によるメディア環境の変化や多様な文化背景をもつ児童の増加によって、児童の言葉をめぐる状況は大きく変化している。また、関連分野の研究によって言葉に関わる学習障害の実態も明らかになってきた。それらのことについて基礎的に理解するとともに、国語科授業がどのように対応していけばよいかについて考える態度を身に付けるようにする。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

児童の言語の定型的な発達の有り様とともに、発達障害、日本語非母語話者などを含む児童の多様な言語の有り様の実態を知ることが、児童の実態に即した学習指導を開発する上でたいへん重要である。また、児童の発達段階や多様な実態に適合する様々な学習評価について理解することも求められる。

◇一般目標

小学校国語科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校国語科における児童の学習の実際や特徴を理解している。

解説:児童の言語の定型的な発達のあり様を知るとともに、その知識と関連させて児童の学習の実際や特徴について具体的に理解するようにする。

②学習評価

到達目標:小学校国語科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:小学校国語科授業における評価について、なぜ評価するのか、いつ評価するのか（診断的・形成的・総括的、日常的な評価）、何を評価するか、どのように評価するのかについて基礎的な知識を得る。とりわけ、平成29年版小学校学習指導要領に示された新しい評価の3観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）や、評価のあり方、小学校の発達段階に適した多様な評価方法のあり方、小学校から中・高等学校までを見通した具体的な領域別の目標とその基本的な考え方、指導と評価の一体化等について学ぶ。

③個々の児童の理解と対応（他教科等との関連を含む）

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方（他教科等との関連を含む）について理解している。

解説:発達障害、日本語非母語話者児童などを含む児童の多様な言語のあり様の実態を知り、個々の児童の言語活動に目を向けて、児童の実態に合わせた適切な対応の仕方について理解するようにする。

2. 授業実践

小学校段階にふさわしい国語科の授業を実施するにあたり、「指導技術」と「授業づくり」は、授業を計画・実施・改善するために必要な要素である。「指導技術」については、小学校国語科におけるICT活用、小学校国語科の授業実践における言語活動や手立ての運用、小学校国語科の授業実践における学習集団の組織、小学校国語科の授業実践における学習活動の構成（ペアトーク・グループトーク・全体討論等）等を扱う。「授業づくり」では、小学校国語科の各分野・領域に関する教材研究、小学校国語科の指導計画（学習指導案）、小学校国語科の授業改善等を扱う。

(1) 指導技術

小学校段階にふさわしい国語科の授業を実践するのに必要となる基本的な指導技術として、小学校国語科におけるICT活用、小学校国語科の授業実践における言語活動や手立ての運用、小学校国語科の授業実践における学習集団の組織、小学校国語科の授業実践における学習活動の構成（討論・ディベート・実習等）について学ぶ。

◇一般目標

小学校国語科の授業実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①小学校国語科の授業実践における ICT の活用

到達目標:小学校国語科の特徴に応じて、授業実践において ICT を適切に活用することができる。

解説:小学校国語科授業における、単元および一単位時間の授業づくりにおいて、どの種類の ICT 機器をどのように使えば学習効果が上がるかについての知識を得るとともに、実際の授業で運用できるだけの操作技術を身に付けるようにする。

②小学校国語科の授業実践における言語活動や手立ての運用

到達目標:小学校国語科の授業実践において、児童の発達や学習状況に応じた適切な言語活動や手立てを用いることができる。

解説:小学校国語科授業においては、児童の発達や学習状況に応じて、各領域において多様な言語活動（課題を発見して探求する活動、読書に発展する活動、地域の人々に発表する活動など）が展開される。また、思考を広げたり深めたりする発問や、図表などを使った板書などの手立てが使われる。それらについての知識を身に付け活用できるようにする。

③小学校国語科の授業実践における学習集団の組織

到達目標:小学校国語科の授業実践において、学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:小学校国語科授業においては、多様な学習集団・学習形態（ペアワーク、グループワークやジグソー学習など）が採用される。どのような分野・領域において、それらの学習集団・学習形態を用いればよいかについての知識を身に付け、実際の授業で活用できるようにする。

④小学校国語科の授業実践における学習活動の構成(討論・ディベート・実習等)

到達目標:小学校国語科の授業実践において、学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:国語科の授業において、個々の児童の思いや意図は、言語を用いて表出されることになる。教師は、児童に自己の考えを他者に分かりやすく表現することを促したり、意図的に児童相互の発言を関連付けるための発問をしたり、児童自身が自己や他者の思いや意図を吟味・検討させるためのなげかけを行ったりして、より深い学びへと導く指導技術を身に付ける必要がある。また、ペア・トークやグループ・ワーク、ジグソー法などによる協働学習、ディベートやパネルディスカッションなど、国語科の学習内容や育成したい資質・能力に応じた学習形態の工夫を行う必要がある。

(2) 授業づくり

小学校国語科の目標や内容を深く理解し、国語科の各分野・領域（「知識及び理解」、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」）にわたって授業を実施できることが求められている。児童理解や背景的関連諸学問との関連を踏まえて、指導計画を構想すること、各分野・領域の教材分析を行うこと、授業改善の視点を身に付けることができるようにする。

◇一般目標

小学校国語科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①小学校国語科の各分野・領域に関する教材研究

到達目標:小学校国語科の目的に応じて、各分野・領域（「知識及び技能」、「理解力・判断力・表現力等」）の教材研究ができる。

解説:小学校国語科の各分野・領域（「知識及び技能」、「理解力・判断力・表現力等」）について、教育目標・育もうとする資質・能力・指導内容に対する理解をもとに、児童の実態に即した教材研究をおこなうことができるようにする。

②小学校国語科の指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:小学校国語科各分野・領域（「知識及び技能」、「理解力・判断力・表現力等」）の到達目標について理解し、教材分析と児童に実態等に応じ、適切な ICT・言語活動・手立て・学習集団・学習活動を盛り込んだ学習指導案を作成することができる。

③小学校国語科の授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:小学校国語科各分野・領域（「知識及び技能」、「理解力・判断力・表現力等」）について、作成した学習指導案を基に実施した模擬授業とその反省を通して、授業改善の視点を身につけることができるようにする。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

① 授業観察:小学校授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の小学校の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童・生徒の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習したことを再確認することが肝要である。そのためには、授業担当者は、学生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定できる力が必要である。

② 模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:実際に模擬授業を実施することで学習目標の設定や教材研究などの計画段階での不備や、発問の適切さ、板書の方法などの実践段階での課題に気付くことができる。そのため、模擬授業に関わる相互評価や振り返りを実施する。

手順例:計画→準備→実施→振り返り→改善→再計画……

③ 講義(小集団でのディスカッションなどを含む)など

解説:講義が主となる授業においても、小集団でのディスカッションやペアトークなどを織り交ぜ、学生の興味関心を喚起するとともに、自他の振り返りに資するように実践する。

[2] 国語科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における国語科の教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方及び言語感覚と国語科に関する背景的な知識及び技能とを身に付ける。

教科に関する科目は、小学校国語科における教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方及び言語感覚と国語科に関する背景的な知識及び技能を身に付けることを目標とする。学習内容は、教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方及び言語感覚と「言葉の特徴や使い方」、「情報の扱い方」、「我が国の言語文化」に関する知識及び技能（「言葉の特徴や使い方」（言葉の働き、国語の文法、国語の語彙、国語の表記、言葉遣い、国語の表現技法、音読・朗読、国語の文字）、「情報の扱い方」（情報と情報の関係、情報の整理）「我が国の言語文化」（伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、読書、書写）との二つからなる。

【学習内容】

1. 教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方及び言語感覚と「言葉の特徴や使い方」「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に関する知識及び技能

(1) 教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方及び言語感覚

児童に対して小学校国語科の授業を行うには、教師自らが言葉による優れた見方・考え方や言語感覚を身に付け、教材分析や授業実践の場において、それらを働かせることができるようにすることが求められる。

◇一般目標

小学校における国語科の教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方及び言語感覚を身に付ける。

◇学習項目

①言葉による見方・考え方

到達目標:教材分析や授業実践に必要な言葉による見方・考え方を身に付けている。

解説:小学校国語科の授業において、教師が言葉による見方・考え方を働かせて教材分析や授業実践をすることができるようになるには、関連的諸学問や領域などの背景的な知識を、「知識及び技能」、「理解力・判断力・表現力等」の指導事項や授業場面と関連付けながら理解し、国語科の学習指導の場において機能する見方・考え方として自覚的に身に付けることが求められる。

②言語感覚

到達目標:教材分析や授業実践に必要な言語感覚を身に付けている。

解説:教材分析や授業実践において、言葉による見方・考え方をより適切に働かせるためには、言葉で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚すなわち言語感覚を磨くことが求められる。ただし、本科目の受講だけで言語感覚を磨くことは困難であるので、教師自らの言語生活において言語感覚を磨くことへの自覚と態度を持つことができるように授業を工夫することが求められる。

(2)「言葉の特徴や使い方」「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に関する知識及び技能

児童に対して小学校国語科の授業を行うにあたっては、教材分析や授業実践に必要な関連の諸学問や領域などの背景的な知識や技能を身に付けておくことが求められる。特に、「言葉の特徴や使い方」（言葉の働き、国語の文法、国語の語彙、国語の表記、言葉遣い、国語の表現技法、音読・朗読、国語の文字）「情報の扱い方」（情報と情報の関係、情報の整理）、「我が国の言語文化」（伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、読書、書写）の指導事項については、関連の諸学問や領域などの背景的な知識や技能を、授業場面を意識しながら身に付けておくことが求められる。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校における国語科の教材分析や授業実践に必要な「言葉の特徴や使い方」「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に関する背景的な知識や技能を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

① 言葉の働き、国語の文法、国語の語彙、国語の表記(「言葉の特徴や使い方」)

到達目標:教材分析や授業実践に必要な、言葉の働き、国語の文法、国語の語彙、国語の表記などに関する知識や技能を身に付けている。(「言葉の特徴や使い方」)

解説:教材分析や授業実践に必要な知識や技能として、「言葉の働き（事物の内容を表す働き、経験したことを伝える働き、考えたことや思ったことを表す働き、相手とのつながりをつくる働き）」、「国語の文法の背景にある知識」、「国語の語彙（語句の量、語句のまとまりや関係、構成や変化、語感や言葉の使い方）」、「国語の表記（仮名遣いや送り仮名の付け方、句読点の打ち方）」など、小学校段階において身に付けておくべき「言葉の特徴や使い方」に関する知識や技能を、授業場面を意識しながら学ぶことが求められる。特に、「国語の文法の背景にある知識」については外国語科との連携を図りながら具体的に学ぶことが求められる。

② 言葉遣い、国語の表現技法、音読・朗読(「言葉の特徴や使い方」)

到達目標:教材分析や授業実践に必要な、言葉遣い、国語の表現技法、音読・朗読などに関する知識や技能を身に付けている。(「言葉の特徴や使い方」)

解説:教材分析や授業実践に必要な知識や技能として、国語の「言葉遣い」、比喩や反復などの「国語の表現技法」、「音読や朗読」を指導する上において必要な、語のまとまり・言葉の響き・文章の構成の知識、発音(調音)・発声、口形、姿勢、また音読や朗読の方法など、小学校段階において身に付けておくべき「言葉の特徴や使い方」に関する知識や技能を、授業場面を意識しながら学ぶことが求められる。

③ 国語の文字(「言葉の特徴や使い方」)

到達目標:教材分析や授業実践に必要な、国語の文字に関する知識及び技能を身に付けている。(「言葉の特徴や使い方」)

解説:教材分析や授業実践に必要な知識や技能として、小学校段階において身に付けておくべき平仮名、片仮名、ローマ字及び学年別漢字配当表の漢字の読み書きと適切な使用に関する知識や技能を、指導場面を意識しながら学ぶことが求められる。

④ 情報と情報の関係、情報の整理(「情報の扱い方」)

到達目標:教材分析や授業実践に必要な、情報と情報の関係(論理)、情報の整理(比較、分類、引用、出典、図示等)

などに関する知識や技能を身に付けている。(「情報の扱い方」)

解説:教材分析や授業実践に必要な知識や技能として、「情報と情報との関係」の背景にある論理や「情報の整理」に関する比較、分類、引用、出典、図示等の仕方など、小学校段階において身に付けておくべき「情報の扱い方」に関する知識や技能を、授業場面を意識しながら学ぶことが求められる。

⑤ 伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、読書(「我が国の言語文化」)

到達目標:教材分析や授業実践に必要な、伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、読書などに関する知識や技能を身に付けている。(「我が国の言語文化」)

解説:教材分析や授業実践に必要な知識や技能として、「伝統的な言語文化(昔話、神話、伝承、古文、漢文、文語調の文章)」、「言葉の由来や変化(言葉遊び、慣用句、故事成語、漢字の構成、語句の由来、共通語と方言、漢字と仮名)」、「読書(読書の意義や効用、読書の方法、学校図書館の構造や本についての知識)」など、小学校段階において身に付けておくべき「我が国の言語文化」に関する知識や技能を、授業場面を意識しながら学ぶことが求められる。

⑥ 書写(「我が国の言語文化」)

到達目標:教材分析や授業実践に必要な、書写に関する知識や技能を身に付けている。(「我が国の言語文化」)

解説:教材分析や授業実践に必要な知識や技能として、姿勢、筆記具の持ち方、点画の書き方、筆順、字形の整え方、文字の集まり(語句・文・文章)の書き方、目的や状況に応じた書き方の選択など、小学校段階において身に付けておくべき「書写」に関する知識や技能を、授業場面を意識しながら学ぶことが求められる。

[3] 効果的な運用のための手立て

① シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを一回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を一回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。

② クラスサイズ

模擬授業などが有効に行われるためには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③ 担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

(2) 小学校教員養成課程 社会科コアカリキュラム解説

[1] 社会科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校社会科における教育目標，育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに，児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

社会科の指導法は，小学校における社会科の学習・指導に関する知識を身に付けるとともに，授業における指導と学習評価の基礎を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「小学校社会科の教育目標や指導内容」「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」），「授業実践」（「指導技術」「授業づくり」）の2つからなる。学習形態は，講義形式に留まることなく「授業観察」，「模擬授業」などを通して小学校の実際の社会科の授業の実態について知るとともに，児童の立場と教師の立場の双方で模擬授業を展開することを通して，理論に裏打ちされた実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識を扱う。これは社会科の授業の土台となる知識であり，これをもとに実践力を身に付けることが重要である。小学校の社会科教育と併せて中・高等学校の社会科・地理歴史科・公民科について扱うことを通して小学校の役割を明確にする。さらに，自治体や学校によって指導体制や教育課程とともに，小学校社会科では地域ごとに学習内容が多様であることを理解することも必要である。

(1) 小学校社会科の教育目標や指導内容

小学校での社会科教育について，主に制度面等を扱う。教育課程での位置づけ，社会科の目標や内容，導入の経緯や変遷，主教材等，現在の社会科についての基本的な知識を身に付け，児童や学校が抱える様々なニーズへの対応の在り方を理解する。また，社会科教育において小学校が担う役割を明確に理解する。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校社会科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校社会科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校社会科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:小学校における社会科教育は、1947（昭和22）年の教科としての創設から学習指導要領改訂のたびに変化しており、社会科が教科として創設された経緯とその後の変遷を理解することの重要性は他教科等と比較して大きい。全人教育を目指す小学校における社会科教育の位置づけを理解し、併せて、社会科・地理歴史科・公民科を通して公民としての資質・能力の育成の大枠をとらえるため、中・高等学校の学習指導要領にも触れることが肝要である。

②学習指導要領

到達目標:学習指導要領がもっている教育課程の基準としての性格並びに全体構造を理解している。

解説:小学校社会科は、1947（昭和22）年に新たな教科として学校教育の中に位置づけられて以来、その教育課程の基準としての性格並びに全体構造は、学習指導要領において示されている。学習指導要領の総則及び社会科の目標、内容、内容の取扱いを把握することにより、学習指導要領がもっている教育課程の基準としての性格並びに全体構造の理解が求められる。加えて、小学校社会科は特に中学年段階においては学校所在地の地域ごとに学習対象が異なる特性をもつことから、この特性と学習指導要領との関係にも留意する必要がある。

③教育目標、指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校社会科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を理解している。

解説:小学校社会科、中学校社会科、高等学校地理歴史科・公民科等を通して公民としての資質・能力育成に関する各校種等が担う役割を俯瞰することを通して、学習指導要領における小学校社会科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を深く理解することが重要である。校種間の円滑な連携のためにも、小学校社会科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を中心に扱いながら、中・高等学校等の社会科関連教育についても触れる必要がある。小学校社会科における「社会的事象の見方・考え方」から中学校社会科における「社会的事象の地理的な見方・考え方」「社会的事象の歴史的な見方・考え方」「現代社会の見方・考え方」との関係にも留意する必要がある。

④小学校社会科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校社会科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:小学校社会科の背景となる関連諸学問は、広領域にわたっている。小学校社会科では、第3学年においては市区町村を中心とする地域社会に関する内容、第4学年においては都道府県を中心とする地域社会に関する内容、第5学年においては我が国の国土と産業に関する内容、第6学年においては我が国の政治と歴史、国際理解に関する内容を取り上げている。小学校社会科の内容は、背景となる関連諸学問や領域との関連に即して、中学校社会科や高等学校地理歴史科・公民科で学ぶ内容との関連からも、①地理的環境と人々の生活、②歴史と人々の生活、③現代社会の仕組みや働きと人々の生活のいずれか

に区分して捉えることができることを理解することが重要である。

⑤社会の変化や児童の実態

到達目標:小学校社会科の内容を指導する際に留意すべき点について理解している。

解説:グローバル化や情報化の進展、自然災害に伴う現代的な諸課題など、社会科で取り扱う内容はこれまで以上に変化が大きくなっている。また、様々な特徴を持った児童に対応した授業も求められている。社会科の指導にあたっては、個々の児童の状態等とともに学校所在地の市区町村や都道府県の地域的な特性に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うことが重要である。実地での見学や調査を実施したり、教科書だけでなく地域素材などの視聴覚教材を活用したり、ワークシートで取り組み状況が分かるよう学習を可視化したりするなど、地域や児童の実態に合わせた指導が必要であることを理解する。また、学級の人数が少ない場合は、複式学級による指導体制をとっていること等も理解し、ペア・ワークやグループ・ワークの学び合い学習やICT等の効果的な活用等の地域の実態に合わせた指導の工夫が必要であることを理解する。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

社会科学習の主体である子どもがどのように学び、対象である社会がどのように学ばれるのか、その特徴を理解することは、指導法の根幹をなす重要な部分である。これらの知識によって、効果的な指導が可能になり、中学校以降の学習との連携がスムーズに行われることが期待される。実際の小学校社会科の授業場面と結び付けながら授業を行い、指導法を追究する視点を持つことが求められる。

◇一般目標

小学校社会科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校社会科における児童の発達の特徴を理解している。

解説:学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いでは「児童の発達の段階を考慮し、社会的事象については、児童の考えが深まるよう様々な見解を提示するよう配慮し、多様な見解のある事柄、未確定な事柄を取り上げる場合には、有益適切な教材に基づいて指導するとともに、特定の事柄を強調し過ぎたり、一面的な見解を十分な配慮なく取り上げたりするなどの偏った取扱いにより、児童が多角的に考えたり、事実を客観的に捉え、公正に判断したりすることを妨げることはないよう留意すること」とされている。社会科で取り扱う内容は、同じ社会的事物・事象を対象にしても、学習のねらいや展開によって異なる結論に至ることも多いことから、中学年と高学年あるいは各学年やクラスごとの児童の発達や実態に応じた教材観や指導観の設定が重要となる。

②学習評価

到達目標:小学校社会科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:社会科の評価については、学習指導要領とともに指導要録、評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料など参照する必要がある。社会科の学習評価の実施に当たっては、評価結果が評価の対象である児童の資質・能力を適切に反映しているものであるという学習評価の妥当性や信頼性が確保されていること、学習評価は児童の学習状況の把握を通して、指導の改善に生かしていくことが重要であり、学習評価を授業改善や組織運営の改善に向けた学校教育全体の取組に位置付けて組織的かつ計画的に取り組むことなどを理解し、指導に生かすことが重要である。その際に特に、児童が多角的に考えたり、事実を客観的に捉え、公正に判断したりした結果を短期的にだけでなく中長期的に見取るあり方にも留意する必要がある。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:社会科の授業でも他教科と同様に一斉授業だけでなく、ペア学習やグループ学習などを通して、個々の児童の調べ学習の結果や考え方を交流する形態を採ることが多くなっている。小学校社会科においては、児童が自ら学習の問題を追究・解決する問題解決的な学習過程を充実させることを重視している。問題解決的な学習とは、単元などにおける学習問題を設定し、その問題の解決に向けて諸資料や調査活動などで調べ、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりして表現し、社会生活について理解したり、社会への関心を高めたりする学習などを指す。このような問題解決的な学習過程の充実を図る際には、個々の児童の主体的な学びを交流することによる対話的で深い学びを実現するように、児童が社会的事象から学習問題を見いだし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程などを工夫することが考えられる。習熟に時間を要する児童については、目標に到達しつつある過程を教員が適切に評価することによって、児童の更なる学習を支援して学習意欲を維持したり、目標を超えた伸長が見られる児童はその先を見通し、学習意欲を維持したりできるような個に応じた学習を行う必要があることを理解する。

2. 授業実践

児童期にふさわしい社会科の授業を実施するための問題解決的な学習を中心とした基本的な指導技術を身に付けるとともに、授業を計画・実施・改善するために必要な要素である題材・教材・指導計画・指導体制・ICT等の活用・学習評価について基本的な内容を学習し、実際に学習指導案を作成する。「授業に必要な知識・理解」とは車の両輪の役割を果たし、指導力の土台となる。それぞれの学習項目について、指導を工夫することが求められる。

(1) 指導技術

問題解決的な学習として課題把握、課題追究、課題解決、新たな課題へと進むプロセスを実践する指導技術を身に付ける。学習対象となる社会的な事物・事象への動機付けと方向付けの引き出し方、情報収集、考察・構想、まとめ、振り返りへの導き方を扱う。このような学習過程に即した問題解決的な学習は、小・中・高等学校を通じた社会科関連教育の基盤をなす部分であり、良質の教材の使用を含めた指導力を確実に身に付けることが求められる。

◇一般目標

実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICT

到達目標:小学校社会科の特徴に応じて ICT を適切に活用することができる。

解説:小学校社会科教育とはICTは親和性がますます強まる可能性が高く、すでにデジタル地図など日常的に活用されている教材も多い。ICT 教材には、教科書や教科用図書「地図」の質と量を補ったり、現実社会と教室を結び付けたりする役割が期待される。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

解説:社会科の授業で扱う学習問題に対しては、児童が自由に予想したり、資料をもとに推論したりしながら、学習問題への児童の思いや考えを引き出しながら進む授業展開が望まれる。課題追究や課題解決の中で、なぜそのように考察・構想したのか、児童の意図を引き出しながら、他の児童との考えなどを交流し合う中で、概念内容豊かな知識が獲得されていくような授業が求められる。

③学習集団の組織

到達目標:小学校社会科の学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:小学校社会科においては、児童が自ら学習の問題を追究・解決する問題解決的な学習過程を充実させることを重視している。問題解決的な学習過程の充実を図る際には、個々の児童の主体的な学びを交流することによる対話的で深い学びを実現するように、児童が社会的事象から学習問題を見だし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程とともに学習集団の組織についても工夫することが考えられる。問題解決的な学習に有効な学習集団の組織は一斉授業だけでなく、ペア学習やグループ学習など、個々の児童の調べ学習の結果や考え方を交流できる多様な形態を、学習内容に応じて適切に活用できることが求められる。

④学習活動の構成(討論・ディベート・実習等)

到達目標:小学校社会科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:資料の提示から児童による読み取りの引き出し、児童とのやり取りの進め方は、問題解決的な学習の一連の流れの中で起こることを理解する。児童の生活経験や効果的な資料などから、社会的物事・事象への動機付けや方向付けをもとに学習問題を設定した後も、課題追究の中で資料収集するに当たっては、児童は新たな社会的物事・事象とも次々に出会うことから、その都度に適切な指導や導きが必要であり、学習問題についての考察・構想から、まとめと振り返りに進む際にも主体的・対話的で深い学びに結びつけるためにも、問題解決的な学習を取り入れた適切な学習活動を構成することが求められる。

(2) 授業づくり

社会科の目標や内容を深く理解し、様々な教材を使用した授業を実施できることが求められている。実際に学習指導案を作成する際には、適切な単元目標を設定した上で、単元を構成する各授業を計画することが必要である。また、長いスパンの単元学習での指導や社会科特有の問題解決的な学習が行えるよう理解を深めなければならない。

◇一般目標

小学校社会科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校社会科の目的に応じた教材研究ができる。

解説:授業で目標とする問題解決的な学習が、意味を伴って児童が取り組めるよう題材を適切に選定することが重要であること、またそのためには子どもの興味・関心や日常生活・他教科等の学習内容などについて深い理解が不可欠であることを理解する。授業において子どもの理解を助け、活発なやり取りを引き出すためにも教科書や教科用図書「地図」とともに、その他の地域の実態に応じた教材が果たす役割は大きい。特に提示資料を選定する際には、児童の発達段階に留意しながら、学校所在地の地域の実情や最新の社会諸科学の成果に基づく資料かどうかを見抜く力も必要である。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:学習到達目標に基づいた年間指導計画・単元計画について扱いながら、学習指導案作成を含む1時間の授業づくりの実際を経験する。地域の実情や最新の社会諸科学の成果をもとに児童の実態に合わせて適切な単元目標を設定することの重要性を理解し、その上で単元計画を立てることが必要である。また、1時間の授業を構成する様々な活動に実際にふれながら、ある程度の授業のレパートリーを増やす。活動を考える際は、ねらいに沿って段階を踏んだ活動内容を工夫することが必要である。なお、小学校社会科においては、1時間で完結するような授業は少なく、中長期的な単元の中で1時間1時間の授業が展開することによる問題解決的な学習のあり方に留意する必要がある。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:教材研究と指導計画の策定を進めて学習指導案を作り上げた後に行う模擬授業において、授業でのねらいは的確であったか、展開の進め方は適切であったか、授業の終わり方はこれで良かったかのかの反省が重要である。小学校社会科では特に授業の終末場面が大事であり、そこで特定の事柄を強調し過ぎたり、一面的な見解を十分な配慮なく取り上げたりするなどの偏った取扱いにより、児童が多角的に考えたり、事実を客観的に捉え、公正に判断したりすることを妨げるものがない結論に至っているかどうか振り返る必要がある。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小・中・高等学校の授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の小・中・高等学校の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童・生徒の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習したことを再確認することが肝要である。そのためには、授業担当者は学生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定できる力が必要である。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:実際に授業実践の一連の流れを経験すること自体の意味が大きい。社会科に苦手意識を持っている学生にとっては、模擬授業の中で問題解決的な学習過程の一部を実践するだけでも大きな挑戦となることがある。実際に模擬授業を実施することで計画段階でも不備や改善の手立てに気づくことができる。模擬授業の有効性を担保するためにも受講者の人数には配慮が必要である。

③講義(小集団でのディスカッションなどを含む)など

解説:教員による一斉講義だけでなく、受講生によるプレゼンテーションや小集団のディスカッションなども積極的に取り入れることで、学習者と授業者の双方の立場に身を置くことができ、双方の視点から活動や指導法を経験し、それぞれの活動や指導法の長所・短所を体験的に学ぶことができる。こうした経験は授業参観・視聴と併せて、指導に必要な知識・技能を認識することや、模擬授業や教育実習の授業のイメージを持つことにつながる。

【2】社会科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における社会科の授業実践に必要な公民としての資質・能力を育成する能力と、社会諸科学に関する背景的な知識と技能を身に付ける。

教科に関する科目は、授業実践に必要な基本的な公民としての資質・能力を、十分に育成できる能力を身に付けること、そのために社会諸科学に関する背景的な知識を理解することを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な公民としての資質・能力を育成する能力」及び「社会諸科学に関する背景的な知識と技能」の2つからなる。社会諸科学に関する背景的な知識を土台に、小学校での授業実践を意識した公民としての資質・能力を育成する能力を目指すことが重要である。また、本科目の受講だけで公民としての資質・能力を育成する能力と社会諸科学に関する背景的な知識を身に付けるのは難しいため、教職課程を履修する学生を対象とした「日本国憲法」などの教養教育科目の中でも、授業実践に必要な公民としての資質・能力を育成する能力と社会諸科学に関する背景的な知識などを積極的に扱う必要が

ある。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な公民としての資質・能力を育成する能力と社会諸科学に関する背景的な知識と技能

(1) 授業実践に必要な公民としての資質・能力を育成する能力

質の高い教育内容に即して、社会科授業の中で意味のあるやり取りをするためには、授業に必要な基本的な公民としての資質・能力を育成する能力を身に付けることが不可欠である。

◇一般目標

小学校における社会科の授業を担当するために必要な公民としての資質・能力を育成する能力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えること

到達目標:授業実践に必要な社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力を身に付けている。

解説:他の事象等と比較・分類したり総合したりすることで捉えることのできる社会的事象の特徴や傾向、そこから見いだすことのできるよさなど、比較したり関連付けたりして捉えることのできる事象と事象のつながりや関わりなど、社会的事象の仕組みや働きなどを地域の人々や国民の生活と関連付けることで捉えることができる社会的事象の社会における働き、国民にとっての役割などを、複数の立場や意見を踏まえて考えることが必要である。

②社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断すること

到達目標:授業実践に必要な社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力を身に付けている。

解説:地域社会における安全の確保や、良好な生活環境の維持、資源の有効利用、自然災害への対策、伝統や文化の保存・継承、国土の環境保全、産業の持続的な発展、国際平和の構築など現代社会に見られる課題について、社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、習得した知識などの中から自分たちに協力できることなどを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして、判断することを、受講生が自信を持って運用ができるようになることを目指すことが大切である。

③社会的事象について、選択・判断したことを適切に表現すること

到達目標:授業実践に必要な社会的事象について、選択・判断したことを適切に表現する力を身に付けている。

解説:考えたことや選択・判断したことを説明する力や、考えたことや選択・判断したことを基に議論する力について、資料等を用いて作品などにまとめたり図表などに表したりする表現力や、調べたことや理解したことの言語による表現力を育成すること、物事の内容や意味をよく分かるように説き明かすことについては、根拠や理由を明確にして、社会的事象について調べて理解したことや、それに対する自

分の考えなどを論理的に説明できるようにすること、互いに自分の主張を述べ合い論じ合うことについては、他者の主張につなげたり、互いの立場や根拠を明確にして討論したりして、社会的事象についての自分の考えを主張できるように養うことが大切である点を意識して取り扱う必要がある。

④社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする事

到達目標:授業実践に必要な社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする力を身に付けている。

解説:主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度、各学年の内容に応じて涵養される地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養うことが重要である。

(2) 社会諸科学に関する背景的な知識と技能

社会科の授業を下支えする社会諸科学に関する知識と技能として、地域や我が国の国土の地理的環境・現代社会の仕組みや働き・地域や我が国の歴史や伝統と文化を通じた社会生活等についての知識、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を扱う。これらは社会科の授業づくりに密接に関わるものであり、その知識を得ることは自信を持って授業を行うことを可能にする。これらの知識を小・中学校の接続も踏まえながら養成段階から十分に身に付けておくことが肝要である。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校における社会科の授業を担当するために必要な背景的な知識と技能を身に付ける。

◇学習項目

①地域や我が国の国土の地理的環境に関する基本的な知識

到達目標:地域や我が国の国土の地理的環境に関する基本的な事柄について理解している。

解説:地域や我が国の国土の地理的環境に関する内容は、第3学年の内容(1)身近な地域や市区町村の様子、第4学年の内容(1)都道府県の様子、(5)県内の特色ある地域の様子、第5学年の内容(1)我が国の国土の様子と国民生活が主に該当する。児童の生活する市区町村や都道府県を中心に、世界の中での日本の地理的環境に関する知識を地理学などの最新の研究成果に即して、理解をしておくことが重要である。

②現代社会の仕組みや働きに関する基本的な知識

到達目標:現代社会の仕組みや働きに関する基本的な事柄について理解している。

解説:現代社会の仕組みや働きに関する内容は、第3学年の内容(2)地域に見られる生産や販売の仕事、(3)地域の安全を守る働き、第4学年の内容(2)人々の健康や生活環境を支える事業、(3)自然災害から人々を守る活動、第5学年の内容(2)我が国の農業や水産業における食料生産、(3)我が国の工業生産、(4)我が国の産業と情報との関わり、(5)我が国の国土の自然環境と国民生活の関わり、第6学年の内容(1)我が国の政治の働き、(3)グローバル化する世界と日本の役割が主に該当する。現代社会の仕組みや働きに関する

知識を政治学や経済学などの最新の研究成果に即して、理解をしておくことが重要である。

③地域や我が国の歴史や伝統と文化を通じた社会生活に関する基本的な知識

到達目標:地域や我が国の歴史や伝統と文化を通じた社会生活に関する基本的な事柄について理解している。

解説:地域や我が国の歴史や伝統と文化を通じた社会生活に関する内容は、第3学年の内容(4)市の様子の移り変わり、第4学年の内容(4)県内の伝統や文化、先人の働き、第6学年の内容(2)我が国の歴史上の主な事象が主に該当する。地域や我が国の歴史や伝統と文化を通じた社会生活に関する知識を歴史学などの最新の研究成果に即して、理解をしておくことが重要である。

④様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能

到達目標:様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能に関する事柄について理解している。

解説:調査活動や諸資料の活用など手段を考えて問題解決に必要な社会的事象に関する情報を集める技能、集めた情報を読み取る技能、読み取った情報を問題解決に沿ってまとめる技能は、情報を収集する手段や情報の内容、資料の特性等に応じて指導することが大事であり、小・中学校の社会科はもとより、高等学校の地理歴史科、公民科においても、学習指導要領解説に掲載の参考資料「社会的事象等について調べまとめる技能」を参考にするなどして、繰り返し身に付けるように指導することが大切であることを理解しておくことが重要である。

[3]効果的な運用のための手立て

① シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。特に教科に関する科目においては、授業を行うのに必要な能力を身に付けることが最重要視されることが期待される。

② クラスサイズ

模擬授業等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③ 担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

(3) 小学校教員養成課程 算数科コアカリキュラム解説

[1] 算数科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校算数科における教育目標，育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに，児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

算数科の指導法は，小学校における算数科の学習・指導に関する知識を身に付けるとともに，授業における指導と学習評価の基礎を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「小学校算数科の教育目標や指導内容」，「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」），「授業実践」（「指導技術」，「授業づくり」）の2つからなる。学習形態は，講義形式に留まることなく「授業観察」，「模擬授業」などを通して小学校の実際の算数科の授業の実態について知るとともに，児童の立場で授業を体験したり教師の立場で模擬授業を行ったりすることを通して，理論に裏打ちされた実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領に示された算数科の教育目標や指導内容についての知識・理解に基づいた実践力を身に付けることが重要である。また，小学校の算数科教育と併せて中・高等学校の数学科教育についても扱うことを通して小学校算数科の役割を明確にする。さらに，自治体や学校によって指導体制や教育課程が多様であることを理解する。

(1) 小学校算数科の教育目標や指導内容

小学校での算数科教育について，主に制度面等を扱う。教育課程での位置づけ，算数科の目標や内容，導入の経緯や変遷，教材等，現在の算数科についての基本的な知識を身に付け，児童や学校が抱える様々なニーズへの対応の在り方を理解する。また，算数・数学科教育において小学校算数科が担う役割を明確に理解する。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校算数科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校算数科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校算数科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:小学校算数科の意義を理解するためには、教科教育の目標としての実用的目標、文化的目標、陶冶的目標と関わる算数の有用性、文化性、陶冶性を視点として、算数科教育の目標を捉えることが大切である。また、明治の学校制度の設立以降から現代に至るまで、各時代の算数科教育の目標が、当時の社会情勢や科学・文化の発展、教育理論の進展等の影響を受けながら変遷してきたことを理解するとともに、現行の学習指導要領に基づく学習指導の成果と課題を踏まえて指導を行う必要性について認識を深めることが大切である。

②学習指導要領

到達目標:学習指導要領における小学校算数科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。

解説:学習指導要領の改訂においては、現行の学習指導要領に基づく学習指導の成果と課題を踏まえ、課題に適切に対応できるような改善が図られている。小学校算数科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解するとともに、小・中・高等学校の算数科教育・数学科教育を通じて「数学的に考える資質・能力」を育成するという視点に立って、小学校の学習指導要領とともに、中・高等学校の学習指導要領にも触れることが肝要である。

③教育目標, 指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校算数科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を理解している。

解説:保育所や幼稚園、中学校、高等学校との連携を念頭に置きながら、学習指導要領における小学校算数科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容の理解を図ることが大切である。そのためには、教員養成の段階で小学校だけを扱うのではなく、保育所や幼稚園における数量や図形に関する教育、中学校や高等学校の数学科教育についても扱う必要がある。その際、学習指導要領を概観するだけでなく、各校種等の実際の授業を参観したり、映像で視聴したりするなど、具体的な実践事例を通して、「数学的に考える資質・能力」の一貫性や指導内容の系統性についての理解を深めることが望ましい。

④小学校算数科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校算数科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:学習指導要領の改訂においては、数学的に考える資質・能力の育成を目指す観点から、実社会との関わりと算数・数学を統合的・発展的に構成していくことを意識して、数学的活動の充実が図られている。この数学的活動は、小・中・高等学校教育を通じて資質・能力の育成を目指す際に行われるものであり、小学校においても、中学校や高等学校と同様に必要な活動である。従来の算数的活動は、数学的活動とされ、目標の中で「数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成することを目指す」と示されている。なお、小・中・高等学校を通して、数学的活動を通して育成を目指す資質・能力は同じ方向にあるが、その数学的活動を通して、知識及び技能として習得する具体的な内容は、小学校段階

では、日常生活に深く関わり、日常生活の場面を数理化して捉える程度の内容が多く、数学として抽象的で論理的に構成された内容とはなっていない。小学校の時に具体物を伴って素朴に学んできた内容を、中学校では数の範囲を広げ、抽象的・論理的に整理して学習し直すことになる。そして、さらに高等学校・大学ではそれらが、数学の体系の中に位置付けられていく。このような小学校算数科と中・高等学校の数学科との関連を踏まえながら指導内容を構造的に理解することが大切である。

⑤社会の変化や児童の実態

到達目標:小学校算数科の内容を指導する際に留意すべき点について理解している。

解説:近年、様々な特徴を持った児童が在籍している。算数科の指導に当たっては、個々の児童の実態に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うことが重要である。例えば、障害のある児童の指導に当たっては、見えにくさ、聞こえにくさ、道具の操作の困難さ、立式や計算の困難さ、注意の集中・持続の難しさ、心理的な不安定や人間関係形成の困難さ等、学習活動を行う場合に生じる個々の困難さが異なることを理解した上で、個々の児童の困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を行う必要がある。また、習熟に時間を要する児童については、目標に到達しつつある過程を教員が適切に評価することによって、児童の更なる学習を支援して学習意欲を維持したり、目標を超えた伸長が見られる児童はその先を見通し、学習意欲を維持したりできるような個に応じた学習を行う必要がある。さらに外国籍の児童に対しては、個々の実態に応じた日本語指導との関連を図りながら算数用語の指導を行う必要がある。また、複式学級による指導、習熟度別の指導、ペア・トークやグループ・ワークの学び合い学習等、地域や児童の実態に合わせた学習形態の工夫も必要である。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

算数科学習の主体である子どもがどのように学び、対象である算数がどのように学ばれるのか、その特徴を理解することは、指導法の根幹をなす重要な部分である。これらの知識によって、効果的な指導が可能になり、中学校以降の学習との接続がスムーズに行われることが期待される。実際の小学校の算数科の授業場面と結び付けながら、児童の学習の実際や特徴に応じた指導と評価の在り方を追究する。

◇一般目標

小学校算数科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校算数科における児童の学習の実際や特徴を理解している。

解説:幼稚園教育要領においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つとして、「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる」ことが挙げられている。小学校の算数科教育においては、幼児期に育まれた数量・図形への関心・感覚などの基礎の上に、算数の学習を通して、「数学的に考える資質・能力」の育成を図ることになる。その際、児童の発達段階と指導

内容の系統性に基づく学習の実際や特徴についての理解を踏まえて指導を行うことが大切である。「図形」の学習を例に、各学年において重視する活動を挙げると、第1学年では、身の回りにあるものの形を観察や構成の対象として、形を構成したり、形作りをしたりすることを重視している。第2学年及び第3学年では、身の回りの事象を図形として捉え、図形の特徴を図形を構成する要素に着目して捉えたり図形の性質から考察したりすることを重視している。第4学年では、平面図形及び立体図形を平行・垂直などの図形を構成する要素に着目しながら、図形の性質や位置の表現方法を見いだしたり、それを基に既習の基本図形を捉え直したり日常の事象の考察に生かしたりすることを重視している。第5学年では、平面図形を合同の視点から、第6学年では、図形を対称の視点から、それぞれ、図形を構成する要素や図形間の関係に着目しながら、図形の構成の仕方やその性質を見だし論理的に説明したり、それを基に既習の基本図形を捉え直したり日常の事象の考察に生かしたりすることを重視している。このように、実際の算数科の授業場面・学習活動と結び付けながら、児童の学習の実際や特徴についての理解を深める。

②学習評価

到達目標:小学校算数科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:算数科における評価について、評価の意義や評価方法、とりわけ、次期学習指導要領に示された新しい評価の3観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）やその評価のあり方、小学校の発達段階に適した多様な評価方法のあり方、小学校から中・高等学校まで見通した具体的な領域別の目標とその基本的な考え方、指導と評価の一体化等についての理解を深める。また、単元の指導計画を作成する段階においては、授業後や単元終了後にめざす子ども像（評価規準）を明確にして、児童がその規準を達成したどうかを評価するための具体的な評価問題の作成と、評価規準にどこまで到達したかを判断するための評価基準の設定を行うことによって、評価規準を達成するための指導の構想（教材、発問、板書計画など）を具体的に練ることができる。このような明確な評価構想に基づく授業構想の在り方についての理解を深める。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方（他教科等との関連を含む）について理解している。

解説:算数科の指導において、個々の児童のニーズに応じて指導内容や指導方法を工夫することが必要となる。例えば、文章に示された数量の関係を式を用いて表すことが難しい場合は、児童が数量の関係をイメージしやすいように、児童の経験に基づく場面を取り上げたり、文章を部分的に示してわかりやすい言葉に置き換えたり、絵や図に表したり、具体物を用いて動作化させたりするなどの工夫を行う必要がある。空間図形のもつ性質を理解することが難しい場合は、空間における直線や平面の位置関係をイメージすることができるように、立体模型で特徴のある部分を触らせるなどしながら、言葉でその特徴を説明したり、見取り図や展開図と見比べながら位置関係を把握したりするなどの工夫を行う必要がある。このような個々の児童のニーズに応じた指導方法の工夫が求められる。

2. 授業実践

児童の実態に応じた多様な数学的表現の活用，自立的・協働的な学習集団の組織，ICTの活用等，算数科の授業の実践に必要な基本的な指導技術を身に付けるとともに，教材研究，指導計画の立案，学習過程，学習状況の評価等，実際の授業づくりに必要な知識・技術を身に付けることが必要である。

(1) 指導技術

数学的表現の多様性と抽象度の違いについて認識し，指導内容の理解を促したり，児童のコミュニケーションに生かしたりするための指導技術を身に付ける。また，自立的・協働的に問題を解決することの意義を実感する学習集団の組織化，ICTの効果的な使用を含めた指導力を身に付けることが必要である。

◇一般目標

小学校算数科の実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICT

到達目標:小学校算数科の特徴に応じてICTを適切に活用することができる。

解説:算数科の指導においては，コンピュータや電卓などを用いて，データなどの情報を処理したり分類整理したり，表やグラフを用いて表現したり，図形を動的に変化させたり，数理的な実験をしたりするなど，それらがもつ機能を効果的に活用することによって，数量や図形についての感覚を豊かにしたり，表現する力を高めたりするような指導の工夫が求められる。また，算数科のプログラミング学習においては，算数科の目標を踏まえ，数学的な思考力・判断力・表現力等を身に付ける活動の中で行う必要があることを理解し，指導に生かすことが重要である。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い，対話することができる。

解説:算数科の特性の一つとして，記号的表現，言語的表現，図的表現，操作的表現，現実的表現等，抽象度の異なる多様な表現様式の存在が挙げられる。算数の授業においては，教師も児童も，これらの多様な数学的表現を用いてコミュニケーションを行っている。教師は，これらの表現の抽象度の違いを認識し，児童の実態や反応に応じて，学習内容の理解を深めるために，適切な数学的表現を用いて指導を行う必要がある。また，教師の示す数学的表現や異なる表現への置き換えは，児童の数学的表現のモデルとなるものである。

③学習集団の組織

到達目標:小学校算数科の学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:算数科では，児童自らが，問題の解決に向けて見通しをもち，粘り強く取り組み，問題解決の過程を振り返り，よりよく解決したり，新たな問いを見いだしたりするなどの「主体的な学び」，数学的な表現を柔軟に用いて表現し，それを用いて筋道を立てて説明し合うことで新しい考えを理解したり，それぞれの考えのよさや事柄の本質について話し合うことでよりよい考えに高めたり，事柄の本質を明ら

かにしたりするなど、自らの考えや集団の考えを広げ深める「対話的な学び」、日常の事象や数学の事象について、「数学的な見方・考え方」を働かせ、数学的活動を通して、問題を解決するよりよい方法を見いだしたり、意味の理解を深めたり、概念を形成したりするなど、新たな知識・技能を見いだしたり、それらと既習の知識と統合したりして思考や態度が変容する「深い学び」を実現することが求められている。算数科における主体的・対話的で深い学びについての理解を深め、問題を自立的、協働的に解決する学習活動の意義を認識する学習集団を組織する必要がある。

④学習活動の構成(討論・ディベート・実習等)

到達目標:小学校算数科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:算数科の授業において、個々の児童の思いや意図は、何らかの数学的表現を用いて表出されることになる。教師は、児童に多様な数学的表現を用いて自己の考えを他者に分かりやすく表現することを促したり、意図的に表現相互の関連付けを図るための発問をしたりして、児童の思いや意図を共有させたり吟味・検討させたりして、よりよい考えへと導く指導技術を身に付ける必要がある。また、ペア・トークやグループ・ワーク、ジグソー法による協働学習など、算数科の学習内容や育成したい資質・能力に応じた学習形態の工夫を行う必要がある。

(2) 授業づくり

算数科の目標や内容を深く理解し、また児童の実態に応じて構成した教材を使用した授業を実施することが求められている。実際に学習指導案を作成する際には、適切な単元目標を設定した上で、単元を構成する各授業を計画することが必要である。また、算数・数学の問題発見・解決の過程を踏まえた数学的活動の授業づくりについての理解を深める必要がある。

◇一般目標

小学校算数科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校算数科の目的に応じた教材研究ができる。

解説:教材研究には、教育内容を視点として、既存の教材がもつ価値を読み解くことを通して授業を構想する「教材解釈」の側面と、教育内容を児童に獲得させるために、教材を選択したり開発したりして授業を構想する「教材構成」の側面がある。例えば、教科書の内容のアレンジは、これらの教材研究の2つの側面を統合するものであり、教師が日々継続して行うことができる教材研究の一例である。算数科の教材研究(教材解釈・教材構成)においては、教材が以下のような特性を有するものであるかどうかをチェックし、必要に応じて、教材を少しアレンジしたり、新たに開発したりすることが求められる。

- ・児童が事象を数理的に捉え、算数科の学習内容に関する課題を見いだすことができる。
- ・算数科の指導内容の系統性を踏まえ、児童が既習の数学的な知識、技能、見方・考え方を用いたり、関連付けたりしながら、問題解決に向かって思考・表現することができる。
- ・問題解決の過程で、多様な数学的な見方・考え方を引き出すことができる。

- ・評価規準が達成された児童の姿を具体的に示す思考・表現を引き出すことができる。
- ・児童が、自己の知識、技能、見方・考え方等の変容を自覚することができる。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:学習到達目標に基づいた年間指導計画・単元計画について扱いながら、学習指導案作成を含む1時間の授業づくりの実際を経験する。その際、算数科の学習内容の系統性と児童の実態に基づいて適切な単元目標を設定することの重要性を理解し、その上で単元計画を立てることが必要である。算数科においては、「事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決し、解決過程を振り返って概念を形成したり体系化したりする過程」といった算数・数学の問題発見・解決の過程が重要である。学習指導案の作成においては、この問題発見・解決の過程についての理解をもとに作成することが大切である。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:模擬授業の実施においては、次期学習指導要領に示された新しい評価の3観点(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」とその評価のあり方についての理解を踏まえ、授業観察の視点を明確にし、指導と評価の一体化の視点から授業の反省を通して授業改善を行う必要がある。また、指導計画を作成する段階においては、授業後や単元終了後のめざす子ども像(評価規準)を明確にし、児童がその規準を達成したどうかを評価するための具体的な評価問題の作成と、評価規準にどこまで到達したかを判断するための評価基準の設定を行うことによって、評価規準を達成するための指導の構想(教材、発問、板書計画など)を具体的に練ることができる。このような明確な評価構想に基づく授業構想の在り方についての理解も深める。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小・中・高等学校の授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の小・中・高等学校の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童・生徒の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習したことを再確認することが肝要である。そのためには、授業担当者は学生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定できる力が必要である。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:実際に授業実践の一連の流れを経験すること自体の意味が大きい。算数を手続きの知識として捉えている学生にとっては、模擬授業の中で算数を理解の対象として扱うだけでも大きな挑戦となること

がある。実際に模擬授業を実施することで計画段階でも不備や改善の手立てに気づくことができる。模擬授業の有効性を担保するためにも受講者の人数には配慮が必要である。

③講義(小集団でのディスカッションなどを含む)など

解説:講義形式の授業においても、部分的に、ペア・トークやグループ・ワーク、ジグソー法による協働的な学習活動を取り入れるなどの工夫を行うことで、学習者の視点からそれぞれの活動の長所・短所を体験的に学ぶことができるようにする必要がある。

【2】算数科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における算数科の授業実践に必要な実践的な数理運用力と算数科に関する背景的な知識を身に付ける。

教科に関する科目は、授業実践に必要な数理運用力を身に付けることと、そのために必要な算数に関する背景的な知識を理解することを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な数理運用力」（「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」）及び「算数科に関する背景的な知識」（「小学校における算数科の学習内容に関わる数学に関する基本的な知識」「数学的な見方・考え方」「数学的な探求の方法や過程」）の2つからなる。算数科に関する背景的な知識を土台に、小学校での授業実践を意識した5つの領域の総合的な数理運用力の習得を目指すことが重要である。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な数理運用力と知識

(1) 授業実践に必要な数理運用力

算数の学習を問題発見・解決と捉えた授業を実践するためには、授業で扱われる一連の指導内容を個別的な単なる知識・技能としてではなく日常の事象を数理的に捉え統合的・発展的に考察する過程で実質的に機能する見方・考え方として活用できるように身に付けることが不可欠である。

◇一般目標

小学校における算数科の授業を担当するために必要な実践的な数理運用力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①数と計算

到達目標:数とその表現や計算の意味と方法などを考察する力を身に付けている。

解説:自然数、有理数の概念、それらの表現方法を理解するとともに、計算の意味と計算の仕方を説明できることは、授業実践に不可欠である。とりわけ、単に計算できる、立式できるということではなく、立式や計算の仕方の根拠を計算の意味の拡張や適用される数の範囲の拡張等と関連付けて考察できるこ

とが大切である。

②図形

到達目標:図形の性質や図形の計量について考察する力を身に付けている。

解説:平面や空間における図形や空間の概念について理解し、図形の定義、性質、用語を的確に用いて事象を形の観点から考察できるようにするとともに、図形を構成する要素の数値化の仕方についての理解を深める。特に、図形を属性の関係概念として捉えることにより、論理的に図形について考察できることが大切である。

③測定

到達目標:量に着目してものごとの特徴を的確に表現する力を身に付けている。

解説:量（内包量，外延量）の大きさや程度を数値化する方法，測定値の表現に必要な単位系について理解することは大切である。とりわけ，量の測定には，大きさや程度を数値化しようとする量そのものが持っている性質の理解と測定のためには単位が必要であることの認識が不可欠である。

④変化と関係

到達目標:伴って変わる二つの数量の関係を考察する力を身に付けている。

解説:数量間の関係を把握して問題解決に生かそうとする考えを育もうとする授業を実践するためには，二つの数量や事象間の依存関係を考察する概念的な方法として関数の考えを理解しておく必要がある。そのためには数量間の関係に着目してものごとを考察しようとする方法のよさとともに，私たちの周りにある様々な事象に関わる典型的な関数関係についての理解を深めておくことが必要である。

⑤データの活用

到達目標:目的に応じて統計的な問題解決をする力を身に付けている。

解説:私たちの身の周りに生じる不確定な事象を考察するために用いられる統計的な問題解決の方法，その方法に用いられている概念や捉え方について正しく理解しておく必要がある。更に，その方法によって導き出される判断や推測の特徴についても理解しておかなければならない。

(2) 算数科に関する背景的な知識

幼・小・中学校の接続を踏まえながら，算数科の授業を支える数学に関する基本的な知識，数学的な見方・考え方，数学的な探求の方法や過程について扱う。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら，小学校における算数科の授業を担当するために必要な背景的な知識を身に付ける。

◇学習項目

①小学校における算数科の学習内容に関わる数学に関する基本的な知識

到達目標:小学校における算数科の学習内容に関わる数学に関する基本的な知識を身に付けている。

解説:小学校における算数科の学習内容に関わる数学に関する基本的な知識を身に付けていることが肝要である。数学の諸分野における初等的内容を扱うのではなく、小学校における算数科及び中学校における数学科の授業で実際に指導される内容を意識しながら、これらの内容についての数学的理解を促すという立場で扱うことが大切である。

②数学的な見方・考え方

到達目標:数学的な見方・考え方について理解している。

解説:算数科の目標の中核に関わっている「数学的な見方・考え方」は、知識及び技能を習得し、習得した知識及び技能を活用して探求したりする一連の数学的な活動を通して育まれより豊かになっていく。そのため、算数科の授業を担当するためには、ものごとの特徴や本質を数学的に捉える際の視点や、思考の進め方や方向性について理解を深めておくことが大切である。

③数学的な探求の方法や過程

到達目標:様々な現象を数学的に探求する方法や過程について理解している。

解説:数学にはできあがった知識体系としての側面もあるが、できつつある過程としての側面もある。数学的活動を通して学習を展開しようとする算数の授業づくりにおいては後者の立場に立つ数学の理解が不可欠であり、問題発見、解決及び発展の過程としての数学を体験的に学ぶ機会が必要である。

[3]効果的な運用のための手立て

①シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。特に、教科に関する科目においては、授業を行うのに必要な数理運用力を身に付けることが最重要視されることが期待される。

②クラスサイズ

模擬授業等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学検討することが望ましい。

③担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

(4) 小学校教員養成課程 理科コアカリキュラム解説

[1] 理科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校理科における教育目標，育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに，児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

理科の指導法は，理科における教育目標，育成を目指す資質・能力，指導内容，理科の学習指導や評価，児童の学習の実際等に関する知識を習得するとともに，授業実践に必要な力を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「小学校の理科の教育目標や指導内容」「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」）と「授業実践」（「指導技術」「授業づくり」）の2つからなる。学習形態は，講義形式に留まることなく「授業観察」や「模擬授業」などを通して小学校の理科授業の実態について知るとともに，児童の立場で授業を体験したり教師の立場で「模擬授業」を行ったりすることを通して，理論に裏打ちされた実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識及び児童期の自然事象の認識の特徴についての知識を扱う。ともに理科の授業の土台となる知識であり，これをもとに実践力を身に付けることが重要である。中学校の理科とのつながりや関連も視野に入れながら，小学校の理科の役割を明確にする。また，社会や生活環境の変化及び児童の自然事象の認識の特徴について学ぶことで，小学校の理科で留意すべき指導の在り方について理解を深めることが求められる。

(1) 小学校理科の教育目標や指導内容

小学校での理科教育について，学習指導要領をもとに主に制度面等を扱う。教育課程での理科の位置づけ，理科で育む資質・能力，理科の目標や内容，理科の教科観の変遷等について基本的な知識を身に付け，児童や学校が抱える様々なニーズへの対応の在り方を理解する。また，小学校の理科教育が担う役割を明確に理解する。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校理科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校理科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校理科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:理科は時代や社会の要請等のもと、教育目標や内容を変化させ、現在に至っている。一方で、自然への親しみ、科学的な見方・考え方や問題解決の態度や能力などを児童に育成するという点で、理科は一貫して固有の意義を有してきている。そうした中、平成29年に改訂された学習指導要領では、理科で育成する資質・能力が、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3つの柱で整理され、設定されることとなった。このような理科の意義や教科観の変遷等を踏まえ、今日の学習指導要領における理科の教育目標や、育成を目指す資質・能力を理解しておくことが必要である。

②学習指導要領の位置付けと構造

到達目標:学習指導要領がもっている教育課程の基準としての性格並びに全体構造を理解している。

解説:理科の学習指導要領の改訂においては、改訂に至るまでの学習指導要領に基づく学習指導の成果と課題を踏まえ、課題に適切に対応できるような改善が図られている。したがって、理科の学習指導要領に示された教育目標や内容の全体構造とともに、改訂の趣旨について理解しておくことが肝要である。

③教育目標、育成を目指す資質・能力、指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における理科の教育目標、育成を目指す資質・能力、指導内容を理解している。

解説:学習指導要領では、各校種との連携を念頭に置き、小学校理科で育成することを旨とする資質・能力を明確にした形で教科目標が設定され、学年及び単元の目標や内容はそれらの資質・能力の育成と関連付けて具体的に示されている。学習内容について個別的に理解するだけでなく、資質・能力の育成との関連はもちろんのこと、「物質・エネルギー」及び「生命・地球」といった領域、学年間や単元間のつながりや関連、生活科や中学校理科等との関連などの観点から構造的に理解しておくことが重要である。

④小学校理科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校理科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:理科の背景となる主な関連諸学問や領域は、物理学、化学、生物学、地学等の学問であり、これらはいずれも自然の事物・現象を対象とし、観察・実験等の方法を用い、客観性、再現性、実証性等の特性を有する科学（自然科学）として成立している。このような理科の背景となる学問や領域と指導内容の関係や構造、及びそれらの教育的価値について理解しておくことが必要である。

⑤社会や生活環境の変化と児童の実態

到達目標:社会や生活環境の変化と児童の実態を踏まえ、小学校理科の内容を指導する際に留意すべき点について理解している。

解説:社会や生活環境の変化に伴って、自然に関わる経験や生活に関わる経験、家庭や学校におけるコンピュータなどのICT環境の中での経験等も変化してきている。このような児童を取り巻く社会や環境等の

変化及び児童の実態は、児童の理科の学習への取り組み方等に少なからず影響を及ぼすものであり、そうした変化や児童の実態にあわせた授業づくりや指導を行う際の留意点について、理解することが必要である。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

理科の学習の主体である児童が、学習の対象である自然の事物・現象についてどのような興味・関心や知識を持ち、どのような学び方を通して理科の見方・考え方を働かせ、資質・能力を獲得していくのか、こうした特徴を理解することは、指導法の根幹をなす重要な部分である。これらの知識を理解することは、理科で目指す資質・能力の育成のための効果的な指導にとって不可欠であり、中学校以降の学習とのスムーズな連携にもつながると期待される。実際の小学校の授業場面と結び付けながら、理科学習論等の知見をもとに指導法を追究する視点を持つことが求められる。

◇一般目標

小学校理科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校理科における児童の学習の実際や特徴を理解している。

解説:理科の学習の対象となる自然の事物・現象について、児童は生活経験などを通して多様な経験を持ち、興味・関心を抱いたり、児童なりの考えを構成したりしている。理科の教育目標を達成するためには、児童期における発達の特性やそれに応じた学習の特質などを踏まえつつ、自然の事物・現象に関わる児童の実態や特徴を把握・理解しておくことが肝要である。

②学習評価

到達目標:小学校理科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:評価の意義、目的、対象、方法等について基礎的な知識を得る。とりわけ、H29年改訂の学習指導要領に示された資質・能力の3観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）に関して理科で求められている具体的な観点を踏まえ、学年及び内容領域に関わる目標とその評価の関係、評価規準と評価基準、指導と評価の一体化、診断的評価、形成的評価及び総括的評価の在り方について学び、理解することが求められる。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:理科の学習の対象となる自然の事物・現象に関わる児童の興味・関心、児童なりの考え、育まれていく知識・技能、思考力・判断力・表現力、問題解決への態度等は学習指導とともに変容する。個々の児童について、その実態や変容を適切に把握しながら、学習指導の在り方や具体的な学習活動、方法などを構想・実践したり、修正したりすることで、学習への意欲を高めたり、主体的な学習を促したり、

問題解決の力を育んだり，科学的な概念を構成したりすることが可能となる。このような児童理解に基づく適切な対応の仕方について理解しておくことが必要である。

2. 授業実践

児童期にふさわしい理科の授業を実施するための基本的な指導技術を身に付けるとともに，資質・能力の育成を目指した理科の授業を計画・実施・改善する上で必要な要素である教材，指導計画，指導体制，ICT等の活用，学習評価について基本的な内容を学習し，実際に学習指導案を作成する。指導技術と授業づくりに関する力は「授業実践に必要な知識・理解」と車の両輪の役割を果たし，指導力の土台となる。それぞれの学習項目について，理科の授業づくりと授業実践に対応できる指導力を身につけることができるよう，工夫することが求められる。

(1) 指導技術

自然の事物・現象に関する興味や関心を喚起し，児童が疑問や問題を見出し，その解決を主体的，科学的に追究していくことへと児童を誘い，児童の学習を支援していく指導技術や，児童なりの考えを引き出したり，異なる考えの交流や共有，深化を図ったりできるコミュニケーションの技法，ICTを効果的に活用する指導技術，さらに，活動に応じて適切な小集団等を構成するなどして学級全体での学習を組織・展開していく指導技術などを身に付けることが求められる。

◇一般目標

小学校理科の授業実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICTの活用

到達目標:小学校理科の特性に応じてICTを適切に活用することができる。

解説:コンピュータ，タブレット端末，観察・実験用のデジタル機器や情報通信ネットワーク等を活用することは，観察・実験の映像的な経過や結果の保存・共有，児童の思考や表現等の履歴の把握やクラスでの発表・共有等，理科の学習指導を効果的に進めることにつながる。また，プログラミングの体験を通して論理的思考力を身に付ける学習活動との関連を図ることにもつながる。ICTの有効な活用法を理解し，理科の学習活動の目的や内容や場面等に応じて適切に活用する指導技術が求められる。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い，対話することができる。

解説:理科の学習の対象となる自然の事物・現象について，児童は生活経験などを通して興味・関心を抱いたり，児童なりの考えを保持したりしている。一方，そうした考えを自分の言葉ではうまく表現できない児童も見られる。児童の発達や学習の状況を把握しながら，児童から考えを引き出したり，児童が自分の言葉で表現したり，仲間と交流し合ったりしながら，主体的・積極的に学習に取り組んでいくことを促すことにつながる言葉がけやコミュニケーションの技法を身に付けるとともに，児童が自分の考えを臆することなく表出し，一人ひとりの学びと協同的な学びの基礎となる教室風土の醸成を図る指導

技術が求められる。

③学習集団の組織

到達目標:小学校理科の学習の特性に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:理科では、児童一人一人が思考したり観察・実験を行ったりする機会を用意するだけでなく、班等の小集団で活動する機会も多い。班などの小集団での活動を組織することは、実験器具の数が限られている等の実情に応じる意味もあるが、同時に、他の児童とともに活動することを通して互いの協力関係を築いたり、他者の考えに触れることで自分の考えを振り返り、再構成する機会を提供したり、小集団での活動を通してクラス全体での考えの共有や深化を図ったりする上で重要である。ペア、小グループ、興味・関心別のグループ、実験方法別のグループなど、指導のねらいや効果に応じて多様な学習集団を組織することの重要性を理解し、実践できる技術を身に付けることが必要である。

④学習活動の構成(観察・実験・討論・話し合い活動等)

到達目標:小学校理科の学習の特性に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:理科の授業では、問題を見いだす場面、予想や仮説を考える場面、予想や仮説を検証する場面、結果を考察する場面などがある。学習の場面に応じて、個々の児童や小集団で思考する活動、小集団や全体で発表したり交流したり討論したりする活動、個人や小集団で観察・実験等を行う活動などを構成し、授業を展開していく技術を身に付けることが必要である。

(2) 授業づくり

理科の目標や内容を深く理解し、理科で求められる資質・能力を養うことができる授業づくりや授業実践を行うための知識や指導力を身に付けることが必要である。ここでは、実際に学習指導案を作成することを通して、児童の実態や特性などを踏まえ適切な単元目標を設定し、その目標を達成するために教材研究を行い、単元構成及び各時間の目標や内容、学習方法や指導方法、学習形態、評価等を具体化していく方法とともに、観察・実験による学習活動の内容や方法等についても検討し、指導計画を立案したり、授業を改善したりしていく方法を身に付ける。

◇一般目標

小学校理科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校理科の目的と指導内容に応じた教材研究ができる。

解説:理科の教材研究は、学習内容の背景となる自然科学についての理解を深めることはもちろんのこと、児童の興味・関心等を踏まえた観察・実験に関する具体的な教材の工夫や選定、観察・実験の予備的検討に基づく指導上の留意点や所要時間の把握など、目的に則した教育活動を授業として計画する上で重要な意味を持っている。教材研究の意義と進め方を理解し、教材研究を行い、その成果を教育活動や授業計画の構想及び学習指導案の作成へと活かしていく方法を身に付けることが必要である。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:学習指導要領で設定されている目標や内容を踏まえ、学習到達目標に基づいた年間指導計画・単元計画について扱いながら、学習指導案作成を含む1時間の授業づくりの実際を経験する。児童の実態を踏まえた適切な単元目標の設定、児童一人一人の経験・知識、学習状況、能力等に応じた学習方法や教育活動、評価計画の立案、学習形態や学習組織等についての理解をもとに、観察・実験等に関わる指導上の留意点や所要時間なども考慮しながら学習指導案を作成する力を身に付けることが必要である。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点と方法を身に付けている。

解説:模擬授業では学生が児童役にならざるを得ないため、実際の児童の反応について学ぶことにはならないが、それでも、教師役と児童役のいずれの学生にとっても、教師の視点や児童の視点から授業実践のための基礎となる力を身に付けることができる。また、指導計画や実践した指導方法に関する成果と課題を見いだすことも可能である。授業の構想、実践、省察の営みを模擬授業を通して経験し、授業改善の視点と方法を身に付けていくことは、授業力量の向上にとって肝要である。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小学校の授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の小学校の理科の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習したことを再確認することが肝要である。そのため、授業担当者は学生が参観する理科の授業や視聴する映像を適切に選定できる力が必要である。

② 模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:学生自身が実際に教師役となり、理科の授業実践の一連の流れを経験することの意味は大きい。実際に模擬授業の計画を立て、教師役となって理科授業を実践し、児童役の子供からのフィードバックなどを踏まえながら振り返りを行うことで、計画した授業構想や教師としての言動や対応について課題や改善の手立てに気づくことができる。模擬授業の有効性を担保するためには、受講者の人数に配慮が必要である。

③ 講義(小集団でのディスカッションなどを含む)など

解説:小学校理科の教育目標や指導内容、児童の学習の実態や特徴、学習指導の方法などに関して体系的な知識や理解を身に付ける上で、講義は効果的な方法である。その一方で、それらの知識や理解を深めたり、具体化したり、学生自身が問題意識をもって主体的・対話的に理科の学習や授業の在り方について検討したりしていく際には、小集団でのディスカッションやプレゼンなどを組み込みながら講義を構

成することが有効になる。

【2】理科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における理科の授業実践に必要な科学的探究力と理科に関する背景的な知識を身に付ける。

教科に関する科目は、理科の授業づくりと授業実践に必要な科学的な資質・能力と理科に関する背景的な知識を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な科学的探究力」と「理科に関する背景的な知識」との2つから構成される。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な科学的探究力と知識

(1) 授業実践に必要な科学的探究力

理科の授業では、自然の事物・現象を対象として問題を見いだし、それを観察・実験等を通して解決していく探究的な活動が重要である。そのような学習活動を授業で構成し実践していくためには、科学的な問題解決の方法やプロセスを理解し、運用できる科学的探究力が必要となる。授業実践では、観察・実験を児童が行うことができるように指導し、場合によっては教師による演示実験として行うことになる。そのためには、「物質・エネルギー」及び「生命・地球」の領域の学習内容について、観察・実験に関するものも含めた科学的探究力を身に付けておくことが必要である。その際、観察・実験で用いる材料や方法等に関する適切な知識や、児童が観察・実験を行う場合の留意点に関する知識を理解し、児童が安全にかつ確実に観察・実験を行うことができるようにするための指導上の知識やスキルも求められる。

しかし、限られた単位時間のなかですべての学習内容に関してそれらの知識やスキルを扱うことは困難であることが想定されるため、学年間の系統性の軸となる学習内容に関する観察・実験を重点的に扱ったり、児童にとって観察・実験の実施の困難性が指摘されている学習内容に関するものを重点的に取り扱ったりするなどして、必要最小限の科学的探究力を確実に身につけることを図る。

◇一般目標

小学校における理科の授業を担当するために必要な科学的探究力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①科学的な探究の方法・プロセス

到達目標:科学的な探究の方法やプロセスを理解し、実践できる。

解説:科学的な探究では、問題を見いだし、予想や仮説を立て、それを検証するための方法や手順を考え、観察・実験を実施し、その結果を表やグラフ、図や絵、文や数値等を用いて適切に表現・記録・整理し、考察を行い、結論を導き出すといった一連の問題解決のプロセスがとられる。このような科学的探究の

方法やプロセスを理解するとともに、そのプロセスでの定量的処理や定性的処理、条件制御、誤差の扱い等についても理解し、科学的探究を実践できる力を身に付けておくことが必要である。

②「物質・エネルギー」の学習内容に関わる観察・実験

到達目標:「物質・エネルギー」の学習内容に関わる観察・実験の内容や方法を理解し、授業で実践できる力を身に付けている。

解説:「物質・エネルギー」の領域には、電気、磁気、光、音、力に関する学習内容と、物質の性質、水溶液、状態変化、燃焼（化学変化）等に関する学習内容があり、それぞれに関わる観察・実験を児童が行いながら学習活動を進めていくことになる。これらの学習に関する観察・実験で用いられる実験器具、機器、試薬などについて適切な知識を持ち、観察・実験の方法や手順などを理解し、授業で実践できる力が求められる。

③「生命・地球」の学習内容に関わる観察・実験

到達目標:「生命・地球」の学習内容に関わる観察・実験の内容や方法を理解し、授業で実践できる力を身に付けている。

解説:「生命・地球」の領域には、人の体のつくりと働き、植物や動物の生殖、生物と環境等に関する学習内容と、流水の働き・大地のつくりと変化、気象・天気、天体（月、太陽、星）等に関する学習内容があり、それぞれに関わる観察・実験を児童が行いながら学習活動を進めていくことになる。また、学習内容によっては、博物館等を活用することで学習活動を効果的なものにできる場合がある。これらの学習に関する観察・実験で用いられる器具、機器、試薬等、及び博物館等の活用について適切な知識を持ち、観察・実験の方法や手順、博物館等の活用方法を理解し、授業で実践できる力が求められる。

④観察・実験に関する安全指導

到達目標:観察・実験に関する安全指導及び薬品管理について理解し、実践できる力を身に付けている。

解説:理科の観察・実験には、加熱器具を用いた操作を伴うものや、試薬を用いた化学反応を対象とするものなど、安全指導が不可欠なものがある。危険を未然に防止するための方法や問題が生じた場合の応急的な対応、薬品管理などについて適切な知識をもち、それを実践できる力を身につけておくことが求められる。

(2) 理科に関する背景的な知識

「物質・エネルギー」及び「生命・地球」の領域の学習内容に関する科学的知識は、学習内容の理解を深め、豊かな教材研究を可能にし、児童なりの考えを科学的な概念へと育む授業づくりと授業実践を行うために不可欠なものである。「物質・エネルギー」及び「生命・地球」のそれぞれの領域における科学的な概念の柱や学習内容の構造を踏まえ、科学的な理解の深化を図ることが必要である。限られた単位時間のなかですべての学習内容に関してその背景的な科学的知識を扱うことは困難であると想定されるため、学年間の系統性の軸となる学習内容を重点的に扱ったり、児童にとって理解困難が指摘されている学習内容を重点的に取り扱ったりするなどの工夫が求められる。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校における理科の授業を担当するために必要な科学的知識を身に付ける。

◇学習項目

①「物質・エネルギー」の学習内容の背景となる基本的な科学的知識

到達目標:「物質・エネルギー」の学習内容の背景となる基本的な科学的知識を理解している。

解説:「物質・エネルギー」の領域は、中学校理科の第一分野に接続する学習内容が扱われ、「エネルギー」と「粒子」という2つの科学の基本的概念が柱となっている。「エネルギー」の概念を柱とした学習内容では、「エネルギーの捉え方」「エネルギーの変換と保存」「エネルギー資源の有効利用」という観点のもと、電気、磁気、光、音、力に関する科学的知識の理解が必要になる。また「粒子」の概念を柱とした学習内容では、「粒子の存在」「粒子の結合」「粒子の保存性」「粒子のもつエネルギー」という観点のもと、物質の性質、水溶液、状態変化、燃焼（化学変化）等に関する科学的知識の理解が必要になる。

②「生命・地球」の学習内容の背景となる基本的な科学的知識

到達目標:「生命・地球」の学習内容の背景となる基本的な科学的知識を理解している。

解説:「生命・地球」の領域は、中学校理科の第二分野に接続する学習内容が扱われ、「生命」と「地球」という2つの科学の基本的な概念が柱となっている。「生命」の概念を柱とした学習内容では、「生物の構造と機能」「生命の連続性」「生物と環境の関わり」という観点のもと、人の体のつくりと働き、植物や動物の生殖、生物と環境等に関する科学的知識の理解が必要になる。また「地球」の概念を柱とした学習内容では、「地球の内部と地表面の変動」「地球の大気と水の循環」「地球と天体の運動」という観点のもと、流水の働き・大地のつくりと変化（自然災害との関連を含む）、気象・天気（自然災害との関連を含む）、天体（月、太陽、星）等に関する科学的知識の理解が必要になる。

[3]効果的な運用のための手立て

①シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。特に教科に関する科目においては、授業を行うのに必要な能力を身に付けることが最重要視されることが期待される。

②クラスサイズ

模擬授業等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

(5) 小学校教員養成課程 生活科コアカリキュラム解説

[1] 生活科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校生活科における教育目標、育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに、児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

生活科の指導法は、「教育目標及び指導内容について理解するとともに、児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける」ことを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「生活科の教育目標や指導内容」「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」）、「授業実践」（「指導技術」「授業づくり」）の二つからなる。学習に当たっては、小学校生活科の授業について文献等を通して理解するだけでなく、実際の授業の参観や映像記録の視聴、模擬授業の実施などを通して、理論に基づいた実践力を身に付けることが求められる。したがって、学習形態は、講義形式に留まることなく「授業観察」「模擬授業」などを取り入れることとする。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

授業実践には、学習指導要領に示された目標や内容などに関する知識が必要である。また、生活科は学校、家庭、地域など児童の生活圏における具体的な活動や体験を通すため、各学校によって教育計画が多様であることを理解することも重要である。

(1) 小学校生活科の教育目標や指導内容

生活科教育について、その意義や変遷、学習指導要領における教育目標、指導内容、及び評価の在り方を理解することは、不可欠な事項である。また、背景となる諸学問や領域、身近な環境の様子や変化、児童の実態などについて理解することも重要である。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校生活科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校生活科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校生活科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:生活科の授業実践のためには、生活科の意義に関する理解が必要である。また、教科観の変遷に関

する理解も必要である。そのため、生活科創設の理念や背景についての理解や、環境や社会情勢、児童の実態などの変化にともなう生活科教育の変遷についての理解が必要であり、生活科の本質や今日的意義を明確に捉えることが求められる。

②学習指導要領

到達目標:学習指導要領がもっている教育課程の基準としての性格並びに全体構造を理解している。

解説:学習指導要領には、教育課程の全体構造、各教科等に固有の見方・考え方、育成を目指す資質・能力、内容などが示されている。学習指導要領の各部分の記述を理解するためには、学習指導要領の機能や位置付け、構造、資質・能力などに関する基礎的な知識が必要である。生活科についても、教育課程の基準としての学習指導要領の全体構造を理解し、それを踏まえて生活科の目標や内容などを把握することが重要である。

③教育目標、指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校生活科の教育目標、育成を目指す資質・能力、指導内容を理解している。

解説:小学校生活科の教育目標、指導内容及び評価は、授業実践に不可欠な知識であり、それぞれの意味を相互に関連付けながら理解することが必要である。小学校生活科では、幼児期の教育との接続、小学校中学年以降の教育との接続、中学校教育への接続などについて理解することも重要である。

④小学校生活科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校生活科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:生活科の内容を指導する際に必要な知識は、人文科学、社会科学、自然科学ほか多岐にわたり、それらは児童が思いや願いを実現する過程に位置付くものである。したがって、背景となる関連諸学問や領域の知見から必要な知識を取り出し、具体的な活動や体験の過程に位置付けた上で、様々な知識を相互に関連付けて構造的、総合的に理解しておくことが求められる。

⑤身近な環境及び社会の変化や児童の実態

到達目標:小学校生活科の内容を指導する際に留意すべき点について理解している。

解説:身近な環境及び社会の変化とは、児童の身近な環境としての人々、社会及び自然の様子及びより大きな社会全体の変化である。それらを具体的に把握し、いわゆる生活科マップや生活科暦に表現して、教育計画の作成や授業づくりに活用することが大切である。そのため、生活科マップや生活科暦の意味や作成の方法を理解することが求められる。また、小学校低学年の児童の実態を把握するために、観察や質問紙調査など様々な実態把握の方法に関する理解が求められる。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

児童は生活科学習においてどのように学ぶのか、その学びをどのように捉えるのか、それをどう理解したり価値付けたりするのかなどに関する学習内容である。小学校低学年の児童が具体的な活動や体験

を通して学ぶ過程を理解したり，体験や表現における児童の具体的な姿を理解したりすることが求められる。

◇一般目標

小学校生活科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに，学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校生活科の学習の実際や特徴を理解している。

解説:小学校低学年の児童は，具体的な活動や体験をしながら，問題を見付けたり，それについて考えたりする。そして，考えたことを実行し，思いや願いの実現に近づいていく。そのような学習過程やそれぞれの学習場面における児童の姿を具体的に理解することが大切である。各種統計資料などに基づき最新の児童の傾向を理解するとともに，個別の児童の学習の実際や特徴を理解する方法を身に付けることが必要である。

②学習評価

到達目標:小学校生活科における評価の観点，学習評価の在り方について理解している。

解説:ここでいう学習評価とは，小学校生活科における児童の具体的な学びの姿を，資質・能力に基づく観点から意味付けたり価値付けたりすることである。また，それを児童に適切に返していき，児童の自己肯定感を高めながら新たな活動へつなげていくことである。そのため，振り返りのカードを使用したりポートフォリオの機能をもったファイルを使用したりして，自己評価の力を育てることも重要である。小学校生活科におけるこのような評価の在り方や方法を理解し，実際の学習場面で運用できることが必要である。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:個々の児童はそれぞれ個性的であり，具体的な学びの姿やその筋道も様々である。また，他教科等や実生活における多様な学びも，児童の姿として一体的に表れてくる。そのため，指導や支援も児童一人一人の個性や状況に合わせて行われることが大切である。このような考え方やその実際について，理解することが求められる。

2. 授業実践

生活科教育に関する知識や技能などを授業実践として現実に活かしていくためには，授業の指導計画としての学習指導案の作成が必要である。また，小学校低学年の児童が具体的な活動や体験など特徴的な学習活動を行うことを支える指導技術が求められる。

(1) 指導技術

小学校生活科の授業を実際に進行していくためには、それに応じた指導技術を身に付けることが必要である。発問、説明、肯定的評価などの言葉を案出することや教師自身の話し方や聞き方の技術、板書、机間指導、個別指導、ワークシートの作成、環境構成など多様な指導技術を、個別で形式的な習得ではなく、その意味を理解し授業展開の文脈の中で実践可能な指導力として身に付けることが求められる。

◇一般目標

実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICT

到達目標:小学校生活科の特徴に応じてICTを適切に活用することができる。

解説:具体的な活動や体験の中で生まれた気づきを伝え合う際に、デジタルカメラなどを適切に使用すれば、教室内でその事象を映像として共有することができる。このように、ICTの活用や板書の使い方などは、小学校生活科の授業実践に必要な指導技術であり、小学校生活科の特質に応じて適切に活用できることが求められる。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

解説:小学校生活科の授業では、小学校低学年の児童の語彙や理解のスピードに合わせて、表情や動作も交え、実物や視聴覚資料も用いながら、豊かにコミュニケーションをとることが必要である。児童の発達や個々の児童の特性を理解しつつ適切にコミュニケーションをするために、様々なコミュニケーション技法を身に付け、実際に用いることができるようになることが必要である。

③学習集団の組織

到達目標:小学校生活科の学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:生活科の授業において、具体的な活動や体験が安全に行われたり、受容的な雰囲気の中で伝え合いが行われたりすることは重要である。このような授業を支えるのが学習集団である。具体的な活動や体験あるいは気づきの伝え合いなどでは、小集団での活動が適当である場合も多い。学習過程や学習活動の意図や学習環境の実際に即して、適切な学習集団を組織することができることが求められる。

④学習活動の構成(体験・表現等)

到達目標:小学校生活科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:小学校生活科の学習は、必ず具体的な活動や体験を通して行われる。具体的な活動や体験の実際は、学習の内容や環境とも関係して多様であり、指導者は様々な条件や制約の中で最適な学習活動を構成することになる。小学校生活科の特性を踏まえ、児童自身がそれぞれの思いや願いに基づき環境に適切に関わるような学習活動を構成することが重要である。また、見付ける、比べる、たとえば、試す、見通す、工夫するなど、深い学びにつながる学習活動を構成することができるようにすることが重要である。

(2) 授業づくり

授業実践に向けては、児童や地域の実態などを踏まえ、生活科の教育目標や指導内容に基づいて授業を計画し、実践できるようになることが必要である。生活科教育に関する多様な情報や知識を収集したり整理したりすること、様々な指導方法を組み合わせたり調整したりできることが大切である。

◇一般目標

小学校生活科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校生活科の目的に応じた教材研究ができる。

解説:小学校生活科の教材、学習対象は児童の身近な環境に存在するが、その例は教科書にも表現されている。児童の実態や小学校生活科の教育目標、指導内容を基礎にしながら、教科書を読解、参照したり児童の環境にある適切な教材を把握したりして、学生自身が環境に適切に関わることを通して、教材、学習対象の特質を具体的に捉えることが大切である。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:年間指導計画や単元計画についての理解を深め、学習到達目標を見据えながら学習指導案を作成し、1単位時間の授業づくりを経験する。本時の目標を明確にすることやいわゆる学習課題、学習活動、学習過程などの整合性を図ることなど、学習指導案の各部分や全体を調整して実践可能な学習指導案を作成できるようになることが求められる。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:小学校生活科の授業実践においては、小学校生活科としての主体的・対話的で深い学びを想定し、授業改善の視点として身に付け、自立的、継続的に授業改善を行えるようになることが大切である。模擬授業の実施やその反省を通して、様々な指導方法を習得するとともに授業改善の視点や方法を身に付けるようにする。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小学校授業映像の視聴や授業の参観

解説:小学校生活科は小学校第1学年及び第2学年に位置付けられているため、学生自身が受けた授業の記憶は断片的であると考えられる。したがって、実際の小学校生活科の授業を直接参観したり映像記録を視聴したりすることによって、授業イメージをもつことは重要である。児童と教師の双方の視点に立ちながら、それぞれの活動や指導法の特徴や留意点を体験的に学ぶことが大切である。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:1単位時間の授業あるいは特定の活動場面を取り出して模擬授業をすると、言葉や身体の振る舞いの重要性や難しさを感じ、指導上の様々な課題を発見することができる。また、教師役だけでなく児童役や参観の学生が存在することは、いろいろな立場から指導の在り方を検討できるため、一層効果的な学習機会とすることができる。小学校低学年児童の多様な実態を想定して、指導の実際を具体的に検討していくことが重要である。

③講義(小集団でのディスカッションなどを含む) など

解説:いわゆる講義形式で、必要な事項についての解説を傾聴し理解することも大切である。その際、部分的にでも適宜ペアでの対話や小集団でのディスカッションなどを取り入れ、事項についての最初のイメージを交流したり聴講を通して得た情報を交流し再構成したりすることは、学生の理解を一層深めることにつながる。

[2] 生活科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における生活科の授業実践に必要な資質・能力と、生活科に関する背景的な知識と技能を身に付ける。

本科目は、小学校生活科の授業実践に必要な実践的な資質・能力と、生活科に関する背景的な知識と技能を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な資質・能力」及び「生活科に関する背景的な知識と技能」の二つからなる。生活科に関する専門的事項については、その範囲が広範であることから、本科目で取り扱った内容を身に付けるとともに、他教科の科目で取り扱う内容や児童の日常生活における具体的な事項などとの関係を認識することが重要である。また、本科目の学習に当たっては、講義の聴講だけでなく、内容に応じて適切な具体的な活動や体験を通すことが必要である。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な資質・能力と知識と技能

(1) 授業実践に必要な資質・能力

小学校生活科の授業実践には、児童の具体的な活動や体験を構成する力、児童と環境との関わりに関する知識、児童が自立し生活を豊かにする過程の理解などが必要である。これらが生活科の授業場面に即して学習されることによって、授業実践に必要な資質・能力を身に付けることができる。

◇一般目標

小学校生活科の授業を担当するために必要な資質・能力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①児童の具体的な活動や体験を構成する力

到達目標:授業実践として、具体的な活動や体験を構成する力を身に付けている。

解説:小学校生活科の特質である具体的な活動や体験を通した学習について、その目的、特徴、留意点などを踏まえ、小学校低学年児童にふさわしい活動として構成することを理解し、実践できることが求められる。また、具体的な活動や体験の過程に、生活上必要な習慣や技能を身に付ける学習の機会を適切に位置付けることも重要である。

②児童が「身近な人々、社会及び自然」を児童自身との関わりで捉えることに関する知識

到達目標:授業実践において、「身近な人々、社会及び自然」を児童との関わりという視点で一体的に捉えることができる。

解説:児童の生活圏としての学校、家庭及び地域における諸事象が、児童とどのように関わっているのかについて体験的、総合的に理解し、児童の視点による関係性を理解することが必要である。また、諸事象に含まれる一つ一つの気付きがどのように関連付き、各教科等へどのように発展するのかを見通すことも重要である。

③児童が「自立し生活を豊かにしていく」過程を理解し、支援する力

到達目標:授業実践において、一人一人の児童が思いや願いを実現しながら「自立し生活を豊かにしていく」過程を理解し、支援することができる。

解説:ここでいう「自立」とは、学習上の自立、生活上の自立、精神的な自立である。また、「生活を豊かにしていく」とは、小学校生活科の学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していくことである。それは、実生活において、まだできないことやしたことがないことに自ら取り組み、自分でできることが増えたり活動の範囲が広がったりして自分自身が成長することでもある。小学校生活科の学習や実生活におけるこのような過程を理解するとともに、児童の取り組みを実際に支援できることが重要である。

(2) 生活科に関する背景的な知識と技能

小学校生活科の授業実践において、児童の主体的・対話的で深い学びを実現するためには、背景的な知識として、合科・関連的な指導や学校段階等間の接続に関する知識、児童の身近な環境に関する知識、児童の生活や成長に関する知識、具体的な活動や体験を構成する際に必要な健康・安全に関する知識などが必要である。これらが授業実践の基本となり適切に活用されるように、生活科の授業場面に即して学習されることが求められる。

◇一般目標

「幼児期の教育及び小学校中学年以降の教育との接続」も踏まえながら、小学校生活科の授業を担当するために必要な背景的な知識と技能を身に付ける。

◇学習項目

①「合科的・関連的な指導」や「学校段階等間の接続」に関する基本的な知識

到達目標:「合科的・関連的な指導」や「学校段階等間の接続」に関する基本的な知識について理解している。

解説:小学校生活科の特質に鑑み、他教科等との合科的・関連的な指導の在り方やその実際を理解することが必要である。また、幼稚園等における教育の概要を捉えて、入学当初の児童の実態を理解し、事例を通して接続期の教育の在り方を考察できるようにすることが必要である。加えて、小学校生活科で育成を目指す資質・能力や指導する内容が、小学校中学年以降にどのように接続するのかについて理解し見通しをもつことが大切である。

②「身近な人々、社会及び自然」に関する基本的な知識

到達目標:「身近な人々、社会及び自然」に関する基本的な知識について理解している。

解説:学生自身による具体的な活動や体験を通して、生活科の内容としての、学校と生活、家庭と生活、地域と生活、公共物や公共施設の利用、季節の変化と生活、自然や物を使った遊び、動植物の飼育・栽培、生活や出来事の伝え合い、自分の成長、に関する基本的な事項についての理解を深めるとともに、必要に応じて自らが知識や経験を再構成できるようになることが必要である。

③「自分自身の生活や成長」に関する基本的な知識

到達目標:「自分自身の生活や成長」に関する基本的な知識について理解している。

解説:人間や人間の生活、人間の成長などに関する知識を、教育学や心理学のほか、たとえば人間学、文化人類学、脳科学などから収集したり概観したりして、生活科を学習する小学校低学年の児童やその実生活の理解に援用し、児童一人一人を適切に理解することができることが必要である。

④健康・安全に留意しながら活動や体験を構成するための基本的な知識や技能

到達目標:健康・安全に留意しながら活動や体験を構成するための基本的な知識や技能について理解し、実践することができる。

解説:児童が具体的な活動や体験を通して身近な環境に関わる際には、健康や安全に関する様々なリスクが伴う。起こりうる様々なリスクやそのマネジメントについて理解するとともに、小学校生活科の授業場面に即してリスクを想定し、健康・安全に留意して実践したり、想定外の出来事に対しても適切に対応したりできるようになることが求められる。

[3]効果的な運用のための手立て

①シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、必ずしもそれぞれを一回の授業で扱うものではない。複数回の授業の中で、繰り返し扱ったり形や角度を変えて扱ったりして学んでいく学習項目も多い。シラバスの作成に当たっては、複数の学習項目を一回の授業で扱ったり一つの学習項目を複数回の授業で扱ったりするなど、各大学で工夫することが望ましい。

また、特に教科に関する授業科目においては、小学校生活科の指導内容に関して、学生自身が具体的な活動や体験を行うことも効果的である。そのため、学生の実態や大学の授業環境に応じて、適切で効果的な授業展開となるように工夫することが期待される。

各教科のコアカリキュラムでは、ICTの活用や模擬授業の実施などについて共通的に示されている。小学校生活科では、その固有性に応じて、それらを適切に取り扱うことが必要である。また、小学校生活科は各教科等との関連が強いことから、他教科等の授業科目の計画や実施状況について情報交換を行い、全体として適切な学習機会が得られるように配慮することも重要である。

②クラスサイズ

小学校生活科の指導法の授業科目においては、模擬授業やディスカッション等をより有効に行うために、クラスサイズや教室の様態についての配慮が必要である。各大学で検討し適切な授業運営ができるように工夫することが望ましい。

③担当教員

小学校生活科の授業担当については、教科の特質を踏まえたうえで、適切な教員の配置が必要であり、各大学で検討し工夫することが望ましい。

(6) 小学校教員養成課程 音楽科コアカリキュラム(試案)解説

[1]音楽科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校音楽科における目標、育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに、児童の学習の実際や様々な学習の指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

音楽科の指導法は、実践に必要な知識・理解に基づき、必要な指導技術を身に付け、自ら授業づくり・授業改善に取り組む実践的指導力を身に付けることを目標とする。学習内容は、「授業実践に必要な知識・理解」（「小学校音楽科の教育目標や指導内容」、「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」）、「授業実践」（「指導技術」、「授業づくり」）の二つからなる。具体的には、学習指導要領に示された小学校音楽科の目標や内容の理解に基づきながら、児童の学習の実際や特徴を理解し、学習評価の在り方、授業における指導方法を身に付けるとともに、自らの実践を省察し、主体的に、授業づくり・授業改善に取り組むことができるようにする。学習形態は、講義形式に留まることなく、「授業観察や体験」、「模擬授業」などを通して小学校の実際の音楽科の授業の実態について知るとともに、「教材研究」、「指導計画の作成」、「模擬授業」の実施と振り返りを通して、理論に裏打ちされた知識を踏まえ、自ら課題意識をもって授業づくりや授業改善に取り組もうとする実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識、児童期における音楽の学習の実際や特徴及び学習評価の在り方に関する知識を扱う。これらは、音楽科の実践を主体的につくり出し、授業改善に取り組める実践力、省察力を身に付けるための土台となる知識であり、各校種等とのつながりや関連も視野に入れながら、小学校音楽科の役割について理解することが求められる。また、生活や社会の変化及び児童の実態について学ぶことで、小学校音楽科で留意すべき指導の在り方についての理解を深める。

(1) 小学校音楽科の教育目標や指導内容

小学校での音楽科教育について、学習指導要領をもとに主に制度面等を扱う。教育課程での音楽科の位置付け、音楽科の目標や内容、教科観の変遷について基本的な知識を身に付けると同時に、関連諸学問の理解に基づき、小学校の音楽科の指導内容を構造的に把握する。くわえて、音楽科の指導内容に関わる地域や社会全体の変化、児童の実態について理解する。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校音楽科の目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校音楽科の意義と、教科観の変遷

到達目標:小学校音楽科の意義と、教科観の変遷を理解している。

解説:小学校音楽科は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を計画的に行う教科である。小学校音楽科の教科としての意義を深く理解するとともに、今日の小学校音楽科の位置付けを正確に理解するために、小学校における音楽教育がどのように成立・変遷してきたのか理解する。

②小学校学習指導要領（音楽）

到達目標:小学校音楽科の教育課程の全体構造を理解している。

解説:学校教育法等に基づき、各学校で教育課程（カリキュラム）を編成する際の基準を大綱的に定めたものである学習指導要領は、各校種ごとに、それぞれの教科等の目標や大まかな教育内容を定めている。前文、総則の内容とともに、学習指導要領および学校教育法施行規則で定めた教科等の年間の標準授業時数等も踏まえ、地域や学校の実態に応じて教育課程を編成するということを理解する。また、学校と社会との協働により「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すものとしての学習指導要領の位置付けを理解する。

③目標、指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校音楽科の目標、育成を目指す資質・能力、指導内容を理解している。

解説:小学校学習指導要領の前文には、幼児期の教育の基礎の上に、中学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、児童の学習の在り方を展望していくために広く活用されるものとなることが求められている。各校種等との連携を念頭に置きながら、小学校が果たすべき役割を理解するとともに、幼小連携、小中連携などの視点から、学習の内容を捉えることが必要である。とくに、幼児期から小学校低学年への接続においては、低学年の児童の学習上の特性や傾向を考慮し、幼稚園教育との連携を図り、教育課程編成上の工夫が求められる。低学年において、音楽が重要な役割を果たすことを理解すると同時に、高学年においては、中学校を見通した児童の学習のあり方について理解しておきたい。

小学校音楽科の目標においては、音楽的な見方・考え方を働かせて、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を育成することを目指す。そして、育成を目指す資質・能力は、三つの柱、すなわち、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」で整理されている。内容は、従前と同様に2つの領域及び〔共通事項〕で構成され、「A表現」では「知識」、「技能」、「思考力、判断力、表現力等」に、「B鑑賞」では「知識」、「思考力、判断力、表現力等」に再整理して示された。育成を目指す資質・能力の三つの柱は音楽科に限らず、小中学校のすべての教科に設定された枠組みであり、目標から内容、評価までを貫く観点となっている。また、このような資

質・能力を育成するためには、教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることが必要である。

④小学校音楽科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:関連諸学問の理解に基づき、小学校音楽科の指導内容を構造的に理解している。

解説:音楽科教育の背景には、様々な音楽文化と、その実践と理論に関わる諸学問がある。「A 表現」（「歌唱」、「器楽」、「音楽づくり」の三分野）、「B 鑑賞」の二つの領域及び〔共通事項〕で構成された内容は、人類の築いてきた音楽文化へのつながりをもつものであると同時に、ごく日常的な人間生活における表現行動とも密接に結びついている。音楽学、民俗学、文化人類学等の、音楽文化に関係する学問領域での知見を踏まえ、音楽科における指導内容を構造的に理解し、教材研究や授業づくりを行うことが求められる。

たとえば、我が国や郷土の音楽を指導する際には、わらべうたや民謡のように、それぞれの土地で口頭伝承され、生活の中で親しまれてきたうた、遊びとともに伝承されてきたうたもあれば、雅楽や能楽のように、歴史の過程の中で専門的に確立されてきたものもあるし、それらの間にも影響関係が存在することを理解しておきたい。多様な種目がそれぞれの表現の特徴をもっているのが日本の音楽のおもしろさでもある。また、諸外国の音楽を指導する際には、それぞれの文化的な背景を踏まえつつ、生活との関わりを捉えやすい音楽、文化との関わりを捉えやすい音楽など、民族音楽学や文化人類学での学問的アプローチを踏まえた指導内容の理解が求められる。多様な音楽文化のよさやおもしろさに触れ、児童が個々の感じ方や考え方に応じて習得したり深めたりできるように、育成を目指す資質・能力別に整理・系統化された小学校音楽科の指導内容の構造を、関連学問領域の成果にも基づきながら把握することが重要である。

⑤生活や社会の変化と児童の実態

到達目標:小学校音楽科の内容を指導する際に留意すべき、生活や社会の変化、児童の実態などについて理解している。

解説:児童の生活や、その生活を営む社会の中には、様々な音や音楽が存在し、人々の生活に影響を与えている。生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わることでできる人を育てること、そのことによって心豊かな生活を営むことでできる人を育てること、ひいては心豊かな生活を営むことでできる社会の実現に寄与することを音楽科では目指している。生活や社会の中の音や音楽の働きの視点から、児童が学んでいること、学んだことを自覚できるようにしていくこと、また、児童が、自分の生活や自分たちを取り巻く社会と、学んだことがどのように関わり、どのような意味があるのかについて意識できるようにすることが、教科としての音楽を学ぶ意味に結び付く。

社会の状況から言えば、グローバル化や情報化の時代においても、学校と地域とのつながりを踏まえつつ、子供たちの生活と音楽との結びつきに留意したい。その一方で、一人一人の児童が、学校での音楽の学びを人生において意味のあるものとして実感できるようにするためには、多様な文化、地域、生活の背景をもつ児童が在籍していることも考慮する必要がある。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

◇一般目標

小学校音楽科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校音楽科における児童の学習の実際や特性を理解している。

解説:小学校音楽科において、育成すべき資質・能力の方向はどの学年においてもどの領域や分野においても同一であるが、指導内容については、児童の発達の段階に応じて扱うことが必要である。例えば、「音楽の縦と横との関係」については、低学年では斉唱と輪唱の違いの面白さ、高学年では重なり方の多様な変化の面白さを感じ取るようにする、など、発達段階に応じて授業設計は異なる。また、曲想と音楽の構造などとの関わりについては、低学年では「気づく」、高学年では「理解する」とされ、また、「学びに向かう力、人間性等」の涵養にかかわっては、低学年では「楽しく」、中学年では「進んで」、高学年では「主体的に」、音楽への関わり方や学習が発達段階に応じて質的に高まっていくよう、発達段階に応じた児童の行動特性や音楽的な成長のありようを理解する必要がある。

②学習評価

到達目標:小学校音楽科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:なぜ評価するのか、いつ評価するのか、何を評価するか、どのように評価するのかについて理解する。学校教育法で示された学力の三要素に基づき、平成28年の中央教育審議会答申では、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点が示されている。指導と評価の一体化を見通した音楽科における学習評価の在り方を理解するとともに、各領域に関わる目標とその評価の在り方、音楽活動の独自性に適した評価方法のあり方（パフォーマンス評価等も含む）、授業過程における評価の在り方、ポートフォリオ評価など、目的に応じた評価を理解し、評価の観点、評価規準、ルーブリック、評価方法、評価の結果のフィードバック等、一連の評価計画について学ぶ。とりわけ、小学校音楽科においては、授業の過程で児童を励まし、価値付けていく評価活動が重要である。そのためにも、児童の表現や発言としっかり向き合い、その内容を的確な評価言で表せる実践力を磨きたい。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:発達の段階や一人一人のニーズに応じた学習のありように関する知識を踏まえ、他の学校種との連続や他教科との連携などに関する基礎的な内容を理解する。

通常の学級においても、発達障害を含む障害のある児童が在籍している可能性があることを前提に、一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細やかな指導や支援ができるよう、学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図、手だてを明確にすることが必要とされている。見えにくさ、聴こえにくさ、楽器や道具の操作の困難さ、動きや移動上の制約、発音のしにくさ、心理的な不安定、人間関係形成の困難さ、読み書きの困難さ、注意の集中を持続することが苦手であることなど、個々の児童

の困難さに応じた指導内容や指導方法を工夫することが求められる。目標や内容の主旨、学習活動のねらいを踏まえ、児童の学習負担や心理面に配慮し、たとえば、音楽を形づくっている要素の表れ方を視覚化、動作化したり、拡大楽譜や声部を色分けした楽譜を用いたり、リズムや旋律を部分的に取り出してカードにして情報を整理したりするなど、適切かつ臨機応変な指導が求められる。

また、生活科を中心としたスタートカリキュラムにおける音楽の位置づけのように、他教科等と関連させて音楽の学習を位置づけることによって、児童の学びを有意義なものにできる。また、総合的な学習の時間や特別活動などにおける音楽活動においても、児童が音楽科の学習内容や学校外の音楽活動とのつながりを意識できるように、様々な場面で発表したり、そのことによって得られた音楽活動の喜びを振り返ったりするなどの活動を位置づけていくことが必要である。

2. 授業実践

児童期にふさわしい音楽科の授業を実施するための指導方法を身に付けるとともに、小学校音楽科の特性に応じて、教材・指導計画・指導体制・ICT等の活用・学習評価について基本的な内容を学習するとともに、実際に学習指導案を作成し、模擬授業の計画、準備、実施、振り返り、改善というサイクルを通して授業を主体的に実践する力を身に付けることが重要である。

(1) 指導技術

◇一般目標

小学校音楽科の授業実践に必要な指導方法を身に付ける。

◇学習項目

①小学校音楽科における学習の特性に応じたICT等の活用

到達目標:小学校音楽科の学習の特性に応じて、授業においてICT等を適切に活用できる。

解説:聴覚だけではなく、視覚や体の動きなど様々な感覚を働かせて音楽への理解を深めたり、音楽の特徴を聴き深めたりするために、コンピュータや教育機器を効果的に活用できるよう指導を工夫することが求められている。授業においてデジタルコンテンツや実物投影機、コンピュータのソフトウェアやICレコーダー等の機器をうまく活用できるように、そうしたメディアについて探索したり、実際に操作して有効性を確認したりしておきたい。

たとえば、児童がICレコーダーやタブレット等で録音・録画しながら試行錯誤することで自分たちの演奏のよさや課題に気付くことができたり、コンピュータを用いることで、児童の主体的な学習活動を進めることができたりするなど、活用方法を工夫することで授業の効果を高めることもできる。また、実物投影機等を用いて教師が資料を大きく映し出すことによって、楽器の演奏の仕方がわかりやすくなったり、良質の視聴覚教材の適切な提示や、オーディオ機器、電子黒板等の活用を行うことによって、教師自身が教室の中で自在に児童とかわりながら評価したり、必要な情報を強調して、色分けした楽譜等を提示したり、合図をしたりすることができ、表現活動の指導の補助的な機能を生かすこともできる。活動を中心に進める音楽科の授業の特徴を踏まえつつ、機器の利点と限界を理解した上で、適切に活用ができるようにして指導の工夫を行えるようにしたい。

また、音楽文化の継承、発展、創造という視点から、著作者の創造性への意識、知的財産権に対する

理解など、情報に関するモラルを身に付けて、教師自身が情報活用能力を高めておくことが求められる。

②小学校音楽科における学習の特性に応じたコミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

解説:音楽科の学習において、音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて感じ取ったことや想像したことなどを友だちと伝え合い、友だちの感じ方や考え方等に共感しながら、自分の感じ方や考え方等を深めていくためには、言葉によるコミュニケーションが必要となる。一方、音楽活動は、音や音楽によるコミュニケーションを基盤としたものであり、言葉で表すことが本来の目的ではない。したがって、音楽科の学習指導を充実するためには、児童の思いを引き出し、伝え合って学習を深められるよう、音楽科の特質に応じた言語活動が適切に位置付けられるよう指導を工夫するとともに、言語と、音や音楽によるコミュニケーションとを随時学習活動の中に位置づけていくようにすることが求められる。児童が主体的に学習活動に取り組むことができるようにするためには、児童の思いや表現、意見などを受容し、児童の学習の状況を刻々に把握しながら、教師自身の指導言、音楽を捉えた言葉、評価言を適切に用いて価値付け、対話的に学習を進めていく必要がある。また、教師の範唱・範奏、伴奏、指揮等で児童を導く際に音楽のよさやおもしろさを児童にわかりやすく伝えることも、音楽科では重要なコミュニケーションである。

③小学校音楽科における学習の特性に応じた学習集団の組織

到達目標:小学校音楽科の学習の特性に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:音楽は人々の生活の中で生まれ、集団の中で育まれ、その活動の多くは集団の中で共有されてきた。そうした特質を踏まえつつ、音楽科の学びの特性を反映し、協働して音楽活動をする楽しさを重視したい。音楽科の特性に応じて、ペア学習、グループ学習、全体での学習と、個人での思考過程、習熟過程をうまく組み合わせる児童の学習の過程を構想し、児童が主体的・対話的に活動に取り組み、学びを深めることができるように、集団を組織することが求められる。

④小学校音楽科における学習の特性に応じた学習活動の構成

到達目標:小学校音楽科の学習の特性に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:学習指導要領解説の「指導計画の作成と内容の取扱い」において、「題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてその良さを見出したりするなど、試行、判断し、表現する一連の過程を大切に学習の充実を図ること」の重要性が指摘されている。

音楽科の学習の特性として、「活動を通して」という点があげられるが、活動的であるから主体的である、ということではない。主体的であるためには、児童自身が①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかどうか、が求められる。また、対話的であるためには、②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できている姿を想定している。くわえて、③習

得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか、という、三つの学びの姿が授業改善の視点として掲げられている。音楽科ならではの「見方・考え方」を働かせ、学びが深まっているときの児童の姿を思い描きながら、学習活動を構想したい。そのためには、教員養成課程における授業そのものを、音楽の本質に迫るような課題探究的な内容や、学生同士で協働しながら、深め合うような内容として、学生自身が見通しをもって進めていくような学修としていくことも必要である。

(2) 授業づくり

◇一般目標

授業づくりの方法を身に付け、自ら授業改善に取り組むことができる。

◇学習項目

①教材研究

到達目標: 目的に応じた教材研究ができる。

解説: 音楽科の授業では、学習のまとまりを題材として設定し、題材のねらいを達成するのにふさわしい教材選択と教材研究が求められる。児童が主体的に探究できるような教材選択・教材研究・教材の活用が求められる。教材選択、教材開発においては、授業過程に即してどのように解釈し、どのように位置づけていくのか、児童との出会いをどう設定するのか、研究することが必要である。言い換えれば、授業過程、学習形態を含めた指導の方法が、教材に内包されている必要がある。文化財としての素材の価値や特質を客観的に解釈するのではなく、授業で取り上げる際の題材観・児童観・指導観が見極められ、育成を目指す資質・能力、児童の学習の深まりの姿まで予想しながら教材研究を行う視点が求められる。教科書を用いる際にも、はじめから教材が「ある」のではなく、学習過程においてどのような働きをするのか、この授業固有の方法と目標に結び付いたときに教材に「なる」という視点をもって教材研究が行えるようにしたい。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標: 学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説: 年間指導計画・題材計画について扱いながら、学習指導案の立案を含む授業づくりの実際を経験する。また、題材など内容や時間のまとまりの中で、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして児童の学びや変容を自覚できる場面を設定したり、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面を設定したり、児童が考える場面と教師が教える場面を学びの深まりをつくりだせるよう題材計画を組み立てたりする。その際、児童の実態に合わせて適切な題材目標を設定することの重要性を理解し、その上で計画を立てることが必要である。活動を考える際は、ねらいに沿って段階を踏んだ活動内容を工夫することが必要である。音楽科では技能の習熟に向けた練習過程が授業に位置づけられることが多いが、短時間の学習の設計にあたっては題材全体を通した指導との関連を常に意識し、単なる反復練習にならないような工夫を考えたい。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:実際に模擬授業の計画・実施・振り返りを行うことで計画段階でも不備や取るべき手立てに気づき、自ら授業づくり・授業改善を主体的に行う実践力を付ける。学習者と授業者双方の立場に身を置きながら、冷静な目で授業を振り返る良い機会となる。自ら主体的に授業づくりを行うためには省察の重要性に気づき、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点を身に付けるようにしていく必要がある。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程には、教員の講義に留まらず以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小学校の授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、授業イメージをもつことは重要である。児童と教師の双方の視点に立ちながら、それぞれの活動や指導法の特徴、留意点を体験的に学ぶことが大切である。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:実際に授業実践の計画、実施、振り返りの一連の流れを経験することの意味は大きい。音楽に苦手意識を持っている学生にとっては、模擬授業の中で伴奏や範唱をするだけでも大きな挑戦となることがあると同時に、教師自身の教材提示や言葉かけの重要性和難しさを感じ、指導上の様々な課題を発見することができる。また、教師役だけではなく児童役になって、いろいろな立場から指導の在り方を検討できる。

③講義(小集団でのディスカッションなど含む) など

解説:適宜小集団での活動も含めて授業を運営し、教員からの伝達に終始するのではなく、アクティブ・ラーニングの視点から、他の学生との意見交流や協働を通して、理解を深める工夫が必要である。

【2】音楽に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における音楽科の授業実践に必要な、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する能力と、音楽科に関する背景的な知識・技能を身に付ける。

音楽に関する専門的事項は、授業実践に必要な、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する能力と、音楽科に関する背景的な知識・技能を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な音楽的能力」と「音楽科に関する背景的な知識・技能」の二つからなる。「授業実践に必要な音楽的能力」は、「曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解と、表したい音楽表現をするために必要な技能の習得を促す力」、「音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりするこ

とを促す力」，「音楽に親しむ態度を養い，豊かな情操を培うことを目指し，音楽活動の楽しさの体験を促す力」の三つの学習項目からなり，「音楽科に関する背景的な知識・技能」は，「音楽表現に関する知識・技能」，「鑑賞に関する知識」，「〔共通事項〕に関連する知識」，「我が国や諸外国の様々な音楽に関する知識・技能」の四つの学習項目からなる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な音楽的能力と音楽科に関する背景的な知識・技能

学習指導要領においては，教科の目標として，「表現及び鑑賞の活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」ことが示されている。このことを念頭に，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する能力と，音楽科に関する背景的な知識・技能を，小学校音楽科の授業場면을意識しながら身に付けていくことが重要である。

授業実践に必要な音楽的能力として挙げている三つの学習項目は，それぞれ，学習指導要領に掲げられている目標の「知識及び技能」の習得，「思考力，判断力，表現力等」の育成，「学びに向かう力，人間性等」の涵養へとつながる学習項目である。これらは，お互いに深く結びついているため，関連を意識しながら一体的に身に付けていきたい。

(1) 授業実践に必要な音楽的能力

◇一般目標

小学校における音楽科の授業を担当するために必要な，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する能力を，授業場면을意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解と，表したい音楽表現をするために必要な技能の習得を促す力

到達目標:曲想と音楽の構造などとの関わりについての理解と，表したい音楽表現をするために必要な技能の習得を促す力を身に付けている。

解説:学習指導要領に掲げられている目標のうち，「知識及び技能」の習得を促すための学習項目である。

まず，児童に指導すべき知識・技能を確認しておきたい。歌唱については，「曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わり」を理解させながら，「範唱を聴いたり，ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能」，「呼吸及び発音の仕方に気を付けて，自然で無理のない，響きのある歌い方で歌う技能」，「各声部の歌声や全体の響き，伴奏を聴いて，声を合わせて歌う技能」を身に付けさせることによって，思いや意図に合った歌唱表現ができる力を育成することが求められる。なお，『小学校学習指導要領解説 音楽編』では，「曲想」とは，「その音楽に固有の雰囲気や表情，味わいのこと」，「音楽の構造」とは，「音楽を形づくっている要素の表れ方や，音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合い」と示されている。

器楽については，「曲想と音楽の構造との関わり」，「多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり」を理解させながら，「範奏を聴いたり，ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏する技能」，「音色や響

きに気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能」、「各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」を身に付けさせることによって、思いや意図に合った器楽表現ができる力を育成することが求められる。

音楽づくりについては、「いろいろな音の響きやそれらの組合せの特徴」、「音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴」を、それらが生み出すよさや面白さに関わらせて理解させながら、「設定した条件に基づいて、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能」、「音楽の仕組みを用いて、音楽をつくる技能」を身に付けさせることによって、発想を生かし、思いや意図に合った音楽づくりができる力を育成することが求められる。

以上のような知識・技能を育成するためには、まず教師自身がこれらを身に付けておくことが不可欠であるが、その際、これらを身に付けるための適切な活動を意識することも大切である。例えば、歌唱の場合、多様な音楽ジャンルにおける歌を模唱・視唱したり、伴奏や他の声部と合わせて歌ったりする活動などが考えられる。器楽の場合、多様な楽器を用いて模奏・視奏したり、伴奏や他の声部と合わせて演奏したりする活動などが考えられる。必要に応じて口唱歌を取り入れるのも効果的であろう。音楽づくりの場合、声や楽器はもちろん、その他の音の出るものを用いた音遊びや即興演奏を、様々な異なる条件に基づいて行ったり、音楽の仕組みに基づいて多様な曲想をもった音楽をつくったりしてみる活動などが考えられる。

また、児童が表したい音楽表現を支えるためには身体による指示、楽器による伴奏や視聴覚機器も重要な役割を果たす。伴奏の技能については、曲想と音楽の構造などとの関わりを意識し、実際に誰かに歌ってもらったり楽器を演奏してもらったりしながら練習することによって高めていきたい。

②音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることを促す力

到達目標:音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることを促す力を身に付けている。

解説:学習指導要領に掲げられている目標のうち、「思考力、判断力、表現力等」の育成を促すための学習項目である。

『小学校学習指導要領解説 音楽編』では、「音楽表現を工夫する」とは、「歌唱や器楽の学習においては、曲の特徴にふさわしい音楽表現を試しながら考えたり、音楽づくりの学習においては、実際に音を出しながら音楽の全体のまとまりなどを考えたりして、どのように表現するかについて思いや意図をもつことである」と示されている。音楽表現を工夫することを児童に促す力を身に付けるためには、多様な表現方法の試行と振り返りをとおして、音楽を形づくっている要素の働きがどのようなよさや面白さ、美しさを生み出しているかを意識しながら、表現方法と表現結果との関連を体験的に学んでいくことが大切である。歌唱や器楽の場合、曲の特徴を意識し、見通しをもって表現を工夫できる力を身に付けていくようにしたい。音楽づくりの場合、児童の発想、思いや意図をできるだけ多様に想定し、その一つひとつを実際に試してみるようにしたい。また、多様なジャンルの音楽がもつ異なる特徴を体験的に理解しておくことも大切である。特に、我が国の民謡や諸外国の音楽、現代音楽のなかには、調性にとらわれない音階や拍のないリズムによる音楽など、多種多様な特徴をもった音楽が数多くみられるが、こうした音楽の特徴を理解しておくことは、児童から豊かな表現を引き出したり、児童の表現を価値付けたりする拠りどころとなる。

『小学校学習指導要領解説 音楽編』では、「音楽を味わって聴く」とは、「音楽によって喚起された

自己のイメージや感情を、曲想と音楽の構造との関わりなどと関連させて捉え直し、自分にとっての音楽のよさや面白さなどを見だし、曲全体を聴き深めていることである」と示されている。音楽を味わって聴くことを促す力を身に付けるためには、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさなどを感じ取り、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えながら、多様なジャンルの音楽を聴く経験を重ねることが大切である。その際、音楽からどのようなイメージや感情を喚起し得るかを自らに問いながら、他者の感じ方とも照らし合わせて取り組むようにしたい。

③音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うことを目指し、音楽活動の楽しさの体験を促す力

到達目標:音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うことを目指し、音楽活動の楽しさの体験を促す力を身に付けている。

解説:学習指導要領に掲げられている目標のうち、「学びに向かう力、人間性等」の涵養へとつながる学習項目である。

学習指導要領に「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う」と示されているように、音楽活動の楽しさの体験を促す力は、教師にとって重要な力のひとつである。

このような力を身に付けるためには、まず教師自身が音楽活動の楽しさを豊かに体験しておくことが不可欠であるが、そうした体験とともに、音楽文化の多様なあり方に目を向け、音楽と人との関わりを意識し、楽しさそのものの多様性を学ぶことも重要である。

(2) 音楽科に関する背景的な知識・技能

音楽科に関する背景的な知識・技能として、「表現活動に関する知識・技能」、「鑑賞活動に関する知識」、「〔共通事項〕に関連する知識」、「我が国や諸外国の音楽に関する知識・技能」を扱う。これらは、「(1) 授業実践に必要な音楽的能力」を下支えする知識・技能として、教師を目指す学生が身に付けておくべき事項である。こうした知識・技能を身に付けることは、自信を持って授業を行うことを可能にすることはもちろん、授業開発やカリキュラムマネジメントを行ううえでの拠りどころにもなる。

学習する際は、すべての学習項目を相互に関連づけながら身に付けていくことが重要である。知識を学ぶ際も、単に記憶するのではなく、実際の表現活動をとおして、音楽に対する感性を働かせて感じ取り、理解するようにしたい。『小学校学習指導要領解説 音楽編』では、音楽科における知識が「児童が音楽を形づくっている要素などの働きについて理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるような知識」と示されているが、このことは、教師を目指す学生が学ぶ際にも同様に意識すべき点である。

なお、このような知識・技能を身に付けるためには、活動を繰り返しながら、継続的に学習を進めることが不可欠である。教員養成課程だけで身に付けられる範囲や程度には限りがあるため、教師になった後も学び続ける姿勢を持つ態度を養いたい。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校音楽科の授業を担当するために必要な背景的な知識・技能を身に付ける。

◇学習項目

①音楽表現に関する知識・技能

到達目標:音楽表現に関する知識・技能を身に付けている。

解説:音楽表現に関する知識・技能については、小学校音楽科における表現活動を踏まえ、次のような内容を体験的に身に付ける。

知識については、声の種類や変声期に関する知識、楽器の名称や種類・素材・演奏法・特徴・扱い方に関する知識、メトロノームや譜面台などの教具及び視聴覚機器の名称や扱い方に関する知識、遊び・言葉による表現・身体による表現・演劇・映画・サウンドスケープなどの音楽と深く関わる文化に関する知識、生活や社会における多様な音楽的営みに関する知識を取り上げる。加えて、表現の対象となる曲などの背景についても、学習しておくことが大切である。

技能については、発声、歌唱、楽器の演奏、伴奏、即興演奏、指揮、作・編曲を幅広く取り上げる。その際、小学校の教科書等を手がかりに、実際の授業を想定しながら、どのような技能がどのような場面で必要になるのかを意識しながら身に付けていくことが大切である。

②鑑賞に関する知識

到達目標:鑑賞に関する知識を身に付けている。

解説:鑑賞に関する知識については、小学校音楽科における鑑賞活動を踏まえ、次のような内容を相互に関連させながら身に付ける。

鑑賞の対象となる多種多様な音楽について、曲想と音楽の構造との関わり、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史などとの関わり、我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解しておくことが求められる。また、音楽や演奏のよさなどと先述の知識とを関わらせ、考えたことを言語などによって表現できる力を身に付けることも重要である。鑑賞の対象である音楽や演奏について、それらの評価とその根拠、生活や社会における音楽の意味や役割、音楽表現の共通性や固有性を、先述の知識に関連づけながら適切に伝えられることを目指したい。

こうした知識を身に付けるため際に留意すべき点として、次の3点が挙げられる。1点目は、知識を学ぶ際に、文献等の内容だけを記憶するのではなく、実際の鑑賞活動を必ず行うようにすることである。2点目は、必要に応じて、文献等以外からも学ぶ機会を設けることである。例えば、演奏者や作曲者など、実際にその音楽の実践に携わっている立場の方から直接話を聞くことは、先述の知識を学ぶための良い方法である。3点目は、可能な限りその音楽や演奏を直接体験するようにすることである。現実的には、録音や録画に頼らざるを得ないことも少なくないが、生の演奏を聴くことや、その音楽が実践されている場に身を置くことは、その音楽や演奏の一層の理解につながるものである。

③〔共通事項〕に関連する知識

到達目標:〔共通事項〕に関連する知識を身に付けている。

解説:学習指導要領には、〔共通事項〕として「音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさなどを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること」、「音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること」を身に付けることができるよう指導することが示されている。

この内容は、児童に身に付けさせたい力であると同時に、教師にとっても、音楽科に関する背景的な知識・技能全体の土台となるものである。さらに、[共通事項]の内容に関連して、音楽理論、音楽形式、楽器の名称や音色と演奏の仕方との関わり、五線譜・一線譜・奏法譜・図形楽譜・テキスト楽譜などの特徴および読譜、移動ド唱法、口唱歌などについても学んでおきたい。

④我が国や諸外国の音楽に関する知識・技能

到達目標:我が国や諸外国の音楽に関する知識・技能を身に付けている。

解説:あらゆる音楽は、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化である。我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくことについては、更なる充実が求められている。今回の学習指導要領では、旋律楽器としてこれまで高学年で例示していた和楽器が第3，4学年の例示にも加えられ、また、配慮事項として、「音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」が新たに示されている。我が国や郷土の音楽の特質を捉え、例えば、話し声を生かした歌い方や口唱歌、楽器の扱い方、体の動き等について、実際の体験を通して理解しておくことが望ましい。学習の際には、このような特質を踏まえて、知識や技能の習得に偏ることなく、そのよさなどを感じ取ることが大切である。

諸外国の音楽など多様な音楽に触れることは、人間の生活と音楽との関わりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育てることになる。また、様々な音楽文化に触れ、その多様性を感じ取ったり理解したりすることは、音楽に対する価値観や視野の拡大を図ることになる。そして、それぞれの音楽のもつ固有性や多くの音楽に共通する普遍性などを知り、自己の音楽の世界を広げていくことは、自分にとって真に価値ある音楽を見いだす契機となる。こうした文化的な背景は中学校段階での指導内容になるが、小学校教師にとっても、学習の継続性を踏まえてこうした文化的な背景を理解しておく必要がある。多様な音楽文化に触れる機会をとおして、人間の生活と音楽との関わりを意識しながら、音楽の素材となる音や、音楽の構造などの諸特徴に気付き、そのよさなどを感じ取ることが大切である。

このような知識・技能は、我が国や諸外国の音楽のよさなどを児童に伝えるために表現活動・鑑賞活動を工夫できる力の土台となる。

[3]効果的な運用のための手立て

①シラバス

コア・カリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。

②クラスサイズ

模擬授業等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

(7) 小学校教員養成課程 図画工作科コアカリキュラム解説

[1] 小学校図画工作科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校図画工作科における教育目標，育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに，児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

図画工作科の指導法は，小学校での造形的な表現活動や鑑賞活動の学習指導に関する知識とともに，授業づくりの方法を身に付けることを目標とする。学習指導で扱う内容は「表現」と「鑑賞」の2領域，並びに，表現及び鑑賞の活動において共通に必要な資質・能力である「共通事項」から構成される。講義形式による基本的な知識・技能の理解と合わせて，ビデオ視聴などを含む授業観察や学校訪問などを通じた体験，児童の立場で授業を受けたり教師の立場で授業を行ったりする「模擬授業」を通して，小学校の図画工作科の授業の実際に即した実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識，並びに，発達段階との関連性を踏まえた児童期の造形的な表現活動や鑑賞活動の特徴に関する知識を扱う。ともに図画工作科の学習指導の土台となる知識であり，これをもとに授業づくりの実践力を身に付けることが重要である。幼稚園教育要領などに示された幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮し，中学校美術科や高等学校芸術（美術・工芸）科などの学習も視野に入れつつ，小学校段階における6年間の学習の見通しを持つことが大切である。また，児童期の表現と鑑賞の活動に見られる創造的表現の発達や美的発達の特徴について学ぶことで，幼児期や青年期とは異なる学習指導の在り方について理解を深めることが重要である。さらに，自治体や学校によって指導体制や教育課程が多様であることも理解する。

(1) 小学校図画工作科の教育目標や指導内容

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校図画工作科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校図画工作科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校図画工作科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説: 戦後，学習指導要領は改訂を重ね，改訂とともに図画工作科の意義と教科観も捉え直されてきた。

学習指導要領の変遷を俯瞰することを通して、時代を超えて変わらない教科の本質とともに時代の状況に応じた変化を捉えられるようにする。全人教育を特徴とする小学校における図画工作科の意義を理解し、併せて、幼稚園教育要領、中・高等学校の学習指導要領にも触れることを通して、各校種が担う役割と関係づけながら児童期に行われる図画工作科の役割を理解できるようにする。

②学習指導要領

到達目標:学習指導要領がもっている教育課程の基準としての性格並びに全体構造を理解している。

解説:小学校は、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施すことが目的であることを理解し、その教育課程の全体構造において、図画工作科は感性・情操教育に位置づけられることを学ぶ。これについて、他教科等はどのような役割を担っているのかを合わせて示し、児童の調和の取れた人間形成に向けて、図画工作科が他教科等とどのように関連付けられて教育課程が構造化されるのかを理解できるようにする。

③教育目標, 指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校図画工作科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を理解している。

解説:学習指導要領に示された目標と内容について、低学年、中学年、高学年の相違と関連性を踏まえながら理解することが必要である。これについては、新しい学習指導要領に記された3つの資質・能力（「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力・人間性等」の涵養）との対応関係を踏まえながら構造的に理解できるようにする。また、評価の観点については、文部科学省から出されている小学校指導要録などを示し、図画工作科の評価の観点を踏まえながら、具体的な学習指導例の検討を基に理解できるようにする。

④小学校図画工作科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校図画工作科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:図画工作科の内容の背景にある絵画、彫刻、デザイン、工芸、メディア芸術などの造形表現、美術史、美学・芸術諸学の学問や領域が、学習指導要領に示された目標や内容とどのように関係してスコープとシーケンスが定められているかを理解する。合わせて、学習指導において、関連諸学問や領域に本質的な問いや探究方法が、全人教育の一環として行われる図画工作科においてどのように生かされるのかを、具体的な授業実践を挙げながら例示することなどが必要である。

⑤芸術・文化・社会の変化や児童の実態

到達目標:小学校図画工作科の内容を指導する際に留意すべき点について理解している。

解説:芸術・文化・社会の変化や児童の実態に応じて、図画工作科の指導内容や指導方法の工夫が行われることを理解する。例えば、グローバル化や情報化が進む今日では、視覚的・文化的環境に大きな変化が生じている。これに応じて、図画工作科では、自国の美術とともに外国の美術についても学習の機会を増やしたり、インターネット等から得られる視覚情報の扱いについて学んだりする必要性が生じて

いることなどを理解する。加えて、近年、特別な配慮を必要とする児童が増加しており、見えにくさ、聞こえにくさ、心理的な不安定、人間関係形成の困難さ、注意の集中を持続することが苦手であることなど、学習活動を行う場合に生じる困難さに留意して、指導内容や指導方法の工夫が行われていることなどを学ぶようにする。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージを持ちながら意味や価値をつくりだすための「造形的な見方・考え方」はどのように獲得されるのか、「表現」と「鑑賞」の2つの活動において感性や想像力はどのようなメカニズムで働くのかなど、学習の主体である児童がどのように学ぶのか、その特徴を理解する。これらの知識によって、効果的な指導が可能になり、中学校以降の学習との接続がスムーズに行われることが期待される。実際の小学校の授業場面と結び付けながら児童の発達を理解し、児童の発達に関する知見を基に指導法を研究する姿勢を育む。

◇一般目標

小学校図画工作科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校図画工作科における児童の学習の実際や特徴を理解している。

解説:「表現」と「鑑賞」に関わる基本的な児童の発達段階を理解し、発達に応じた児童の学習の実際や特徴を把握する。低学年、中学年、高学年のそれぞれについて、児童の反応の仕方、具体的な児童作品や、美術鑑賞の記述内容などを検討し、発達段階による表現や鑑賞の特徴の変化を理解する。例えば、脱中心的な思考に移行し写実的表現を求めるようになる小学校中学年頃になると、それまでに顕著であった創造的な表現が見られなくなる傾向があり、この課題を克服するために、中学年以降は、多様な美術の表現や技法に触れさせる学習が進められることなどを理解する。

②学習評価

到達目標:小学校図画工作科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:なぜ評価するのか、何を評価するのか、どの場面でどのように評価するのかについて基礎的な知識を得る。とりわけ、新しい学習指導要領に示された育むべき資質・能力（「知識・技能」の習得、「思考力・判断力・表現力等」の育成、「学びに向かう力・人間性等」の涵養）と「表現」と「鑑賞」の2領域に関わる目標との関連性、評価の観点をういた学習評価の在り方、図画工作科の特性に適したポートフォリオ評価やパフォーマンス評価など多様な評価方法の在り方とその基本的な考え方、形成的アセスメントによる指導と評価の一体化などについて学ぶ。

③個々の児童の理解と対応(他教科との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:児童一人一人が自分の個性を生かしながら資質・能力を十分に働かせ、自分のよさや可能性を見出すために、一人一人に適した表現方法や材料、用具などを選ぶことができる幅広い学習活動を準備する必要性や、他教科との関連を考慮した学習指導について理解する。また、特別な配慮を必要とする児童などの指導に当たっては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫が計画的、組織的に行われることを理解する。

2. 授業実践

児童期にふさわしい小学校図画工作科の授業を実施するために、「表現」と「鑑賞」にかかわる基本的な指導技術を身に付け、授業を計画・実施・改善するために必要な要素である題材・教材・指導計画・指導体制・ICTなどの活用・学習評価について基本的な内容を学習し、実際に学習指導案を作成する。

「授業に必要な知識・理解」とは車の両輪の役割を果たし、指導力の土台となる。

(1) 指導技術

学習効果と児童の学習意欲を高めるために、図画工作科の授業づくりにおけるICTの活用、コミュニケーションスキル、適切な学習集団の組織化の方法、児童の発達や学習状況に応じた小集団での活動の導き方について理解する。

◇一般目標

実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICTの活用

到達目標:小学校図画工作科の特徴に応じてICTを適切に活用することができる。

解説:図画工作科では、ICTを適切に活用して、視覚情報をベースにした効果的な学習が展開できる指導技術を身に付けていることが求められる。簡単な操作で、何度でもやり直したり、色などを変えたりできるコンピュータを用いることによって、児童の表現の可能性を広げることができる。鑑賞活動においては、インターネットから作品や作品に関する情報を見つけて、自己の学習を深めていく手掛かりに活用することができる。このような情報機器は児童の学習活動の可能性を広げるものであるが、実際にものに触れたり見たりすることが、感性の育成を主眼とする図画工作科では重要であることを踏まえ、学習のねらいに応じて利用方法を十分に検討する必要性があることを理解する。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

解説:児童の主体的な学びを促す授業づくりのために、児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、コミュニケーションが取れる力を身に付ける。図画工作科では、児童が表したい思いを受け止め、励まし、伸ばすことが肝要であり、これをベースに児童とのコミュニケーションがどのように行われるのか

を、具体的な授業場面と結びつけて理解する。理解を促すために、児童の発言、行動、ワークシートなどを取り上げ、これらを教師がどのように読み取り児童とどのようなコミュニケーションを行うのかを具体的に示すようにする。

③学習集団の組織

到達目標:小学校図画工作科の学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:児童一人一人の感性や思考の仕方を尊重する図画工作科では、日頃からお互いの考え方や感じ方を認め合える学習集団を形成しておく必要がある。実際の授業づくりにおいて、そのような学習集団を形成するために、教師は児童とどのような関係づくりを行うのか、どのような指導技術の工夫を行うのか、具体的な場面を取り上げながら、児童とのかかわり方、学習活動の構成方法、評価の在り方などを理解する。

④学習活動の構成(造形体験, 製作活動, 鑑賞活動, 話し合い活動等)

到達目標:小学校図画工作科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:学習効果を高めるために、学習の特徴に応じて学習活動が構成されることを理解する。例えば、作品の完成を目的としない造形遊びの学習においては、児童のイメージをもとに、思いのままに発想や構想、技術的工夫などを生み出していく力を伸ばすために、多様なイメージの発展を促す自然物や人工の材料が用いられ、広い空間の中で、比較的、柔軟な時間枠の中で活動が行われる必要がある。また、鑑賞の学習においては、地域の美術館などを利用して授業が行われたり、学芸員を教室に招いて教師と共に学習指導が行われたりする。表現の活動においては、児童のイメージを作品として実現化するために、製作方法と合わせて、材料や用具の安全な扱い方、活動場所に関する指導が必ず含まれることなどを理解する。安全な扱い方とは、実際に使う際の使い方だけでなく、片付け方や管理方法なども含まれる。これについては、材料や用具を実際に取り扱うなどして、体験的に理解することが必要である。

(2) 授業づくり

図画工作科の目標や内容を深く理解し、主題材を使用した授業を実施できることが求められる。教材研究の方法、学習指導案の作成、学習方法や学習形態の設定について演習を通して身に付けることが重要である。模擬授業を通じた演習では、学習の準備、計画、実施、評価、新しい準備と計画というPDCAサイクルについて学び、授業づくりの質的向上につながるリフレクションが伴う実践力を身に付ける。

◇一般目標

小学校図画工作科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校図画工作科の目的に応じた教材研究ができる。

解説:製作が伴う図画工作科では、教師が事前に作品の試作を通して、学習指導において予測される課題の検討が行われ、課題を踏まえて適切な学習指導案や教材が準備される。自分で教材を研究する意義を

体得させ、教材は、学習のねらいに応じて工夫、開発されることを具体的な学習指導と結び付けながら理解する。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:到達目標に基づいた年間指導計画及び題材指導計画について扱いながら、学習指導案作成を含む1単位時間(45分)の授業づくりの実際を経験する。児童の実態に合わせて適切な題材目標を設定することの重要性とともに、教師自身による作品試作を含む教材研究を踏まえて、学習計画を立てることの必要性を学ぶ。学習指導計画の中の1単位時間の学習指導、ねらいに沿って「導入」「展開」「まとめ」のそれぞれの段階の活動内容がどのように計画されるのかを学ぶ。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:学習指導計画の中の1単位時間(45分)の授業を取り上げて模擬授業を小グループで実施し、授業構成、学習形態、発問・指示・説明、板書・教具・環境、評価などの指導技術の面から検討し、授業改善の視点と方略を明確化する。また、検討から明らかになった改善点を踏まえて、学習指導計画を修正し、PDCAサイクルによる一連の活動を通して、リフレクションが伴う実践力を高める。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義と合わせて、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小学校授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の小学校の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に、授業場面を通して学習したことを再確認することが肝要である。そのためには、授業担当者は受講生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定することが必要とされる。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:学習者の立場に身を置くことで、学習者の視点から活動や指導法を経験し、それぞれの活動や指導法の長所・短所を体験的に学ぶことができる。こうした経験は授業参観・視聴と併せて、指導に必要な知識・技能を認識することや、模擬授業や教育実習の授業のイメージを持つことにつながる。図画工作科では、準備段階における材料、用具、教材などの研究が特に重要であり、これを十分に行った上で、模擬授業を実施し、指導方法の不備や改善の手立てについて検討する。模擬授業の有効性を担保するためにも模擬授業を行うグループ人数には配慮が必要である。

③講義(小集団でのディスカッションなどを含む) など

解説:授業担当教員が講義する内容に関しては、受講生が児童の具体的な姿や授業イメージと結びつけて理解するために、実際の授業で使われたワークシートや教材を用いて例示することが望まれる。講義内容を自分の知識として定着させるために、講義の後に関連する質問を与えて小集団によるディスカッションを行うなどの工夫を取り入れるとよい。

【2】 図画工作に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における図画工作科の授業実践に必要な造形的能力と図画工作科に関する背景的な知識と技能を身に付ける。

教科に関する科目は、授業実践に必要な基本的な造形的能力と図画工作科に関する背景的な知識と技能を理解・習得することを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な造形的能力」（「対象や事象を捉える造形的な視点について理解できる力」「材料や用具を使い、創造的に発想や構想をしたり、表現したりできる力」「作品や生活の中の造形などに対して自分の見方や感じ方を深められる力」「図画工作科の学習内容を生活や社会と関連づけられる力」）及び「図画工作科に関する背景的な知識と技能」（「造形あそび」「絵や立体、工作」「鑑賞」「共通事項」）の二つからなる。図画工作科で育成する資質・能力に関わる「授業実践に必要な造形的能力」と図画工作科の学習内容である「図画工作科に関する背景的な知識と技能」を関連づけながら指導することが望まれる。

【学習内容】

1. 図画工作科の授業実践に必要な造形的能力と図画工作科に関する背景的な知識と技能

(1) 授業実践に必要な造形的能力

小学校の図画工作科で育成を目指す資質・能力の理解と習得を目的とする。造形的能力には、材料や作品、出来事などを形や色などの視点で捉える力、材料や用具を使って創造的に発想や構想、表現できる力、作品や生活の中の造形などに対して自分の見方や感じ方を持ちそれを深めていける力、そして、学習した内容を生活や社会と関連づけていく力が含まれる。これらの内容は、『小学校学習指導要領』で示された図画工作科の目標に基づいており、それらをまとめて造形的能力としている。

教員養成課程における資質・能力の取り扱いは二つの側面を持つ。一つは、受講者自身が上記の資質・能力の内容を理解し身に付けること、もう一つは、小学校での図画工作科の学習を通して児童に資質・能力を育成できる指導力を身に付けることである。「(2) 図画工作科の背景的な知識と技能」の学習と関連付けながら、図画工作科の活動で何が目指されているのかを受講者が理解し、身に付けることが重要である。

◇一般目標

小学校における図画工作科の授業を担当するために必要な造形的能力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①対象や事象を捉える造形的な視点について理解できる力

到達目標:授業実践に必要な、対象や事象を捉える造形的な視点について理解できる力を身に付けている。

解説:『小学校学習指導要領解説 図画工作編』において「造形的な視点」とは、材料や作品、出来事などを捉える際の「形や色など」、「形や色などの感じ」、「形や色などの造形的な特徴」、さらには「手触りなど」のことであり、「一人一人が感性や想像力を働かせて様々なことを感じ取ったり考えたりし、自分なりに理解したり、何かをつくりだしたりするときなどに必要となるもの」とされる。本事項で重要な点は、他教科との関連も意識しつつ図画工作科に固有の造形的な視点を理解し、身に付けることである。

②材料や用具を使い、創造的に発想や構想をしたり、表現したりできる力

到達目標:授業実践に必要な、材料や用具を使い、創造的に発想や構想をしたり、表現したりできる力を身に付けている。

解説:『小学校学習指導要領解説 図画工作編』において、「創造的に発想や構想」をすることとは「自分にとって新しいものやことをつくりだすように発想や構想をすること」とされ、「創造的につくったり表したりすること」とは、「自分の思いを基に活動を充実させ、自分らしくつくったり表したりする技能を伸ばすこと」とされる。本事項で重要な点は、図画工作科の学習では造形的な創造活動が目指されていることを理解すること、そして、受講者自身も創造的に発想、構想、表現できる力を身に付けることである。

③作品や生活の中の造形などに対して自分の見方や感じ方を深められる力

到達目標:授業実践に必要な、作品や生活の中の造形などに対して自分の見方や感じ方を深められる力を身に付けている。

解説:『小学校学習指導要領解説 図画工作編』において「作品など」の中には、自身や友人の作品、美術作品、製作過程、生活の中の造形、自然、文化財が含まれ、児童が見たり感じたりする対象が幅広く示されている。そして、「自分の見方や感じ方を深められる力」とは、「自分なりに対象や事象を味わうことができるようにすること」、そして「児童が自分なりに新しい見方や感じ方をつくりだすこと」とされる。本事項で重要な点は、見たり感じたりすることは受動的な活動ではなく、自らの感性や想像力を働かせながら主体的に意味や価値をつくり出す活動であることを理解すること、そして、受講者自身もそのような見方や感じ方を深められる力を身に付けることである。

④図画工作科の学習内容を生活や社会と関連づけられる力

到達目標:授業実践に必要な、図画工作科の学習内容を生活や社会と関連づけられる力を身に付けている。

解説:『小学校学習指導要領解説 図画工作編』において「学習内容を生活や社会と関連づけられる力」とは、「図画工作科の学習活動において、児童がつくりだす形や色、作品などや、家庭、地域、社会で出会う形や色、作品、造形、美術などと豊かに関わる資質・能力」とされる。本事項で重要な点は、学習した内容を学校内に留めるのではなく、学習した内容が生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、そして国内外の美術文化と関連づけられることを理解すること、そして、受講者自身も学習内容を生活

や社会と関連付けられる力を身に付けることである。

(2) 図画工作科に関する背景的な知識と技能

受講者が『小学校学習指導要領』に示された図画工作科の学習内容の領域を一通り経験し、表現や鑑賞、そして、それらに共通して働く力に関する知識と技能を習得することが肝要である。「表現」における「造形遊び」では、製作しながら考えることや材料や用具の多様な使い方、そして場所、空間の活用に関する知識と技能を身に付けること、「絵や立体、工作」では、発想・構想し、創造的に表現するための指導に必要となる基礎的な知識と技能を身に付けることが求められる。「鑑賞」では適切に造形作品を収集・選択・活用できる知識と技能を身に付けること、そして、「共通事項」では「表現」及び「鑑賞」に共通して必要となる形や色、そしてイメージに関する指導の知識と技能を身に付けることが求められる。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校における図画工作科の授業を担当するために必要な背景的な知識と技能を身に付ける。

◇学習項目

①造形遊び

到達目標:造形遊びに関する基礎的な知識と技能を身に付けている。

解説:造形遊びは、即興的・総合的な活動であり、材料や場所、空間から発想を広げる活動である。必ずしも具体的な作品をつくることを目的としていないことから、創造のプロセス、材料の扱い方、場との関係のつくり方などに着目した指導が小学校では求められる。そのため、例えば場所や空間の意味づけ、材料の特性を生かした多彩な活用方法、ものの配置や活動場所、空間の選定など、活動が活発に行われるための環境づくりや安全指導に関する知識と技能の習得が必要となる。また、インスタレーションや光を用いた表現などの空間を対象とした造形表現、ワークショップ、アート・プロジェクトなどの取り組みと学校での学習活動との関連を示すことで、美術と学校教育との関連について学習することも望まれる。

②絵や立体、工作

到達目標:絵や立体、工作に関する基礎的な知識と技能を身に付けている。

解説:絵や立体、工作には「表したいことを見つけてつくる」場合と「用途や目的があるものをつくる」場合がある。これらは発想・構想段階ではアプローチが異なるが、いずれも「作品を製作すること」を前提としているため、発想や構想の方法、そして思い描いたものを創造的に実現できる技能の指導が小学校では求められる。そのため、例えば発想や構想を促進する手立て、平面や立体で表現する場合の観察の視点や構成などの知識と技能、材料や用具の取扱い方法や安全への配慮、そして、表現と鑑賞の相関などに関する知識と技能の習得が必要となる。また、絵や立体、工作の背景となる素描、絵画、版画、彫塑、デザイン、工芸、そして、デジタルカメラやパソコンなどのICT機器を用いたメディア表現や建築などと学校での学習活動との関連を示すことで、美術と学校教育との関連について学習することも望ま

れる。

③鑑賞

到達目標:鑑賞に関する基礎的な知識と方法を身に付けている。

解説:鑑賞には、日常的事象を美的に捉える活動や、自己や他者の作品を相互に鑑賞する活動、そして国内外の造形作品を鑑賞する活動がある。また、鑑賞のみが単独で行われる場合と、表現と一体化して行われる場合がある。小学校における鑑賞では、作品や生活の中の造形などに含まれる多様なよさや美しさに児童が気づけるような指導や、鑑賞を通して児童が自分なりの意味や価値を創造していけるような指導が求められる。そのため、例えば鑑賞を行う際の観点の提示や授業の目的に応じて適切に作品などを収集、選択、活用できる知識と方法、そして製作と鑑賞とを互恵的に結びつけられる知識と方法の習得が必要となる。また、鑑賞の背景となる美術理論、美術史、美学などの芸術諸学と学校での学習活動との関連を示すことで、美術と学校教育との関連について学習することも望まれる。

④共通事項

到達目標:共通事項に関する基礎的な知識を身に付けている。

解説:共通事項には、表現や鑑賞に共通して必要となる形や色及びイメージに関する指導が含まれる。例えば、形の指導では、観察により事物を構造的に捉える視点や平面表現・立体表現における捉え方や表現方法の違い、また抽象形態における形の効果など、そして色の指導では、発達段階に応じて色の三属性や混色、色が持つ実用的、心理的な働きなどに関する知識の習得が求められる。また、イメージの指導では、材料や用具、またテーマから発想・構想を広げ・深める方法、児童が有する知識と作品とを関連づけて考える方法、そして、児童が製作したものが身の回りや社会にどのように活用できるかを考える方法など、児童が創造的に思考・判断・表現し、それが価値あることだと感じられるような、指導に関する知識の習得が必要である。これらの内容は表現においても鑑賞においても必要となる能力である。それゆえ、共通事項は単体で分離して指導することのみならず、表現や鑑賞のいずれの活動においても繰り返し意識できる指導が求められる。

備考

「(2) 図画工作科に関する背景的な知識と技能」の①～④は単独で扱ってもよいし、複合的に扱ってもよい。例えば、紙を材料として表面に彩色を施す立体作品を製作する活動では、導入時に材料の特性を理解するための「造形あそび」が行われ、その後の基体づくりで「立体」、着色で「絵」、最後に作品テーマに関連する世界各国の文化や立体表現の多様性に関する「鑑賞」の学習が行われる場合がある。また、これらすべてには「共通事項」の学習が含まれる。このように、複合的な内容の場合も①～④の学習内容の領域を意識し、さらには「(1) 授業実践に必要な造形的能力」の①～④を連関づけづけながらシラバスを編成することが求められる。

[3]効果的な運用のための手立て

① シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。

② クラスサイズ

模擬授業などが有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③ 担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。

(8) 小学校教員養成課程 家庭科コアカリキュラム解説

[1] 家庭科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校家庭科における教育目標，育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに，児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

家庭科の指導法は，小学校での家庭科の学習指導に関する知識とともに，授業における指導と学習評価の基礎を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（現在の小学校家庭科教育についての知識・理解），授業実践（「指導技術」「授業づくり」）の2つからなる。学習形態は，基本的な知識理解のための講義，ビデオ視聴等を含む授業観察，児童の立場で授業を受けたり教師の立場で授業を行ったりする「模擬授業」等であり，理論に裏打ちされた授業実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識，並びに，発達段階との関連性を踏まえた児童期の生活の営みに係る見方・考え方の特徴に関する知識を扱う。ともに家庭科の学習指導の土台となる知識であり，これをもとに授業づくりの実践力を身に付けることが重要である。中学校家庭科などの学習も視野に入れつつ，小学校高学年における2年間の学習の見通しを持たせることが大切である。また，実践的・体験的な活動を通して，児童期の生活をよりよくしようと工夫する活動の特徴について学ぶことで，幼児期や青年期とは異なる学習指導のあり方について理解を深めることが求められている。さらに，自治体や学校によって指導体制や教育課程が多様であることを理解することも必要である。

(1) 小学校家庭科の教育目標や指導内容

小学校における家庭科の歴史的変遷，小学校教育課程における家庭科の位置づけ，目標や内容，主要な題材等を理解する。また，現在の家庭科についての基本的な知識を身に付け，児童や学校が抱える様々なニーズへの対応の在り方を理解する。さらに，家庭科教育において小学校が担う役割を明確に理解する。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校家庭科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校家庭科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校家庭科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:戦後、学習指導要領においては改訂とともに家庭科の意義と家庭科観も捉え直されてきた。現行の学習指導要領に示された意義と家庭科観を過去のものとして照らし合わせて理解することで、家庭科の在り方を深く捉えることができる。学習指導要領の変遷を理解することを通して、教科の本質とともに時代の状況に応じた変化を捉える。

②学習指導要領

到達目標:学習指導要領における小学校家庭科の目標及び内容並びに全体構造を理解している。

解説:学習指導要領に示された目標と内容については、小学校家庭科で育成を目指す生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を、3つの資質・能力（『知識・技能』，『思考力・判断力・表現力等』，『学びに向かう力・人間性等』）との対応関係を踏まえながら構造的に理解する。

③教育目標、指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校家庭科の教育目標、育成を目指す資質・能力、指導内容を理解している。

解説:小学校における家庭科の意義を理解させ、併せて、中・高等学校の学習指導要領にも触れることを通して、各校種が担う役割と関係づけながら児童期に行われる家庭科の役割を理解できるようにする。また、受講学生が教員として採用された後、使用することが想定される主題材について、その趣旨・構成・特徴等を扱うことが必要である。これについては、文部科学省検定の家庭科教科書に掲載されている題材を中心に、教師用指導書等を活用しながら、学習指導計画や年間カリキュラムの編成等との関係を理解する。

④小学校家庭科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校家庭科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:家族・家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、「協力・協働」、「健康・快適・安全」、「生活文化の継承・創造」、「持続可能な社会の構築」などの視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫するための「生活の営みに係る見方・考え方」について理解させる。その際、家庭科の内容を家庭・地域、社会という空間的広がりという空間軸と、これまでの生活からこれからの生活という時間軸で捉えて整理する。そして、家庭科の背景となっている家政学などの諸学問や領域が、学習指導要領に示された目標や内容とどのように関係してスコープとシークエンスが定められているかを理解する。併せて、学習指導において、関連諸学問や領域における本質的な問いや探究方法が、家庭科においてどのように生かされるのかを、具体的な授業実践例をもとに検討する。

⑤生活環境の変化や児童の実態

到達目標:生活環境の変化や児童の実態を踏まえ、小学校家庭科の内容を指導する際に留意すべき点につ

いて理解している。

解説:児童を取り巻く生活環境の変化や生活経験が少ないなどの児童の実態を適切に把握した指導のあり方を理解させる。これら児童の環境変化や実態に対応した授業を作ることで、家庭科の学習効果の最大化が図られることを理解する。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

生活をよりよくしようと工夫する実践的な力はどのようなメカニズムで発揮されるのかなど、学習の主体である児童がどのように学びを深めていくのか、その特徴を理解することは、指導法の根幹をなす重要な部分である。これらの知識によって、効果的な指導が可能になり、中学校以降の学習との接続がスムーズに行われることが期待される。実際の小学校の授業場面と結び付けながら児童の発達を理解し、児童の発達に関する知見をもとに指導法を追究する姿勢を持つことが求められる。

◇一般目標

小学校家庭科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校家庭科における児童の発達や生活経験など多様性に応じた学習の実際や特徴を理解している。

解説:家庭科における児童の発達を考える場合、履修学年である小学校高学年の児童の発達の特徴を理解するのみならず、その時期は生涯の中でどのような発達課題があるのかも理解する必要がある。なお、児童一人一人の発達や生活経験などは個人差があるため、個に応じた指導の必要性を理解することが重要である。児童一人一人の学習活動を行う場合に生じる困難さを見取り、その要因を把握したうえで、指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行う必要がある。

②学習評価

到達目標:小学校家庭科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:なぜ評価するのか、誰が何を評価するのか、どの場面でどのように評価するのかについて基礎的な知識を得る。とりわけ、新しい学習指導要領に示された育むべき資質・能力（「日常生活に必要な家族や家庭、衣食住、消費や環境などについての基礎的な理解とそれらに係る技能である『知識・技能』の習得」，「日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、課題を解決する『思考力・判断力・表現力等』の育成」，「家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度である『学びに向かう力・人間性等』」）と「「家族・家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活・環境」に関わる目標との関連性、評価の3観点（「知識・技能」，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」）を用いた学習評価の在り方、家庭科の特性に敵った多様な評価方法の在り方とその基本的な考え方、形成的アセスメントによる指導と評価の一体化等について学ぶ。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:児童期における発達特性、及び個々の児童の特性や教育的ニーズ、生活課題、学習課題などを十分に踏まえ、学びの過程において考えられる困難さに気づき、理解し、それに応じた指導の工夫ができることが必要である。通常学級においても特別な教育的配慮を要する子ども一人一人の教育的ニーズに適切な対応ができる実践的な指導力が求められている。また、家庭科の特質を踏まえ、他教科などとの関連について考慮することも重要である。

2. 授業実践

児童期にふさわしい家庭科の授業を実施するために、生活者としての自立と共生にかかわる基本的な指導技術を身に付ける。また、授業を計画・実施・改善するために必要な要素である題材・教材・指導計画・指導体制・ICT等の活用・学習評価について基本的な内容を学習し、実際に学習指導案を作成する。これらの授業実践力と「授業に必要な知識・理解」とは車の両輪の役割を果たし、指導力の土台となる。

(1) 指導技術

学習効果と児童の学習意欲を高めるために、家庭科の授業づくりにおけるICTの活用、コミュニケーションスキル、適切な学習集団の組織化の方法、児童の発達や学習状況に応じた小集団での活動の導き方について理解する。

◇一般目標

小学校家庭科の実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICTなどの活用の仕方

到達目標:小学校家庭科の特徴に応じてICTを効果的に活用することができる。

解説:家庭科では、生活事象の原理・原則を科学的に理解するための指導や学習の見通しをもたせる指導、個に応じた指導、児童生徒の協働的な学びを推進するための指導において、ICTを適切に活用して効果的な学習が展開できる指導技術を身に付ける必要がある。日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、情報通信ネットワークを活用して解決するなど、様々に試しながら生活課題の解決の可能性を広げていくことができる。このような学習を通して、生活の営みに係る見方・考え方を深めていく手掛かりに活用することもできる。情報機器などの活用は主体的・対話的で試行錯誤し深い学びを実現する児童の学習活動の可能性を広げるものであり、学習のねらいに応じて利用方法を十分に検討する必要がある。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

解説:家庭科の学習指導に際しては、児童一人一人によって異なる興味・関心、生活経験、生活課題、作

業速度などに留意して、それを生かすように学習を進める必要がある。その際、児童一人一人の良さを見取り、その可能性を伸ばしていけるコミュニケーションスキルを身に付けることが重要である。

③学習集団の組織

到達目標:小学校家庭科の学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる。

解説:児童は一人一人の生活経験などが異なるため、家庭科では、日頃からお互いの考え方や感じ方を認め合える学習集団を育成し組織できることが重要である。生活課題を解決する学習においては、個々の児童が主体的・対話的で深い学びを実現できるように、生活事象から課題を見出し、それを追及し、解決する過程を支援できる多様な学習集団を組織することの重要性を理解し、実践できる技術を身に付けることが必要である。学習集団は一斉学習のみではなく、ペア学習、グループ学習などで組織することもでき、興味・関心別グループ、解決方法別グループなど指導のねらいに応じて適切に活用できることが求められる。

④ 学習活動の構成(討論・ディベート・実習等)

到達目標:小学校家庭科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:家庭科における学習内容の定着を図り、児童一人ひとりの個性を生かし伸ばすため、児童の特性や生活体験などを把握し、小集団での活動を取り入れた学習の導き方に関する技術を身に付けることが必要である。理論に関する学習における小集団での活動では、自分とは異なる様々な生活の営みに係る見方・考え方があることに気付き、多様な生活的価値観を認め合い、高め合うことにつながる。実習を伴う学習における小集団での活動では、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を、調理や製作などの実習や実験、調査、観察などの実践的・体験的な活動を通して習得できるような導き方を身に付ける。特に、実習を伴う学習においては、安全かつ効果的に進めるよう配慮し、事故防止に留意することが重要である。

(2) 授業づくり

家庭科の目標や内容を深く理解し、主題材を使用した授業を実施できることが求められる。教材研究の方法、学習指導案の作成、学習方法や学習形態の設定について実習を通して身に付けることが重要である。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりを進めるに当たり、家庭科の学びの深まりの鍵となるのが「生活の営みに係る見方・考え方」である。家庭科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「生活の営みに係る見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせる授業づくりを通じて、より質の高い教育効果が期待できる。

◇一般目標

小学校家庭科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校家庭科の目的に応じた教材研究ができる。

解説:家庭科においては、授業前に理論学習と実習による学習を連動させながら、適切な学習指導案や教材を考案する。教材は、学習のねらいに応じて工夫されることを具体的な学習指導の場面と結び付けながら検討し、主要な題材に関して学習指導案を作成するプロセスにおいて、実際に教材を作成し、その効果について検討することが必要である。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:学習到達目標に基づいた年間指導計画及び題材指導計画について扱いながら、学習指導案作成を含む1時間の授業づくりの実際を経験する。児童の実態に合わせて適切な題材目標を設定することの重要性とともに、教師自身による教材研究を踏まえて、題材計画を立てることの必要性を学ぶ。題材の学習指導計画の中の1時間の授業を取り上げ、ねらいに沿って「導入」「展開」「まとめ」のそれぞれの段階の活動内容がどのように計画されるのかを学ぶ。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:模擬授業の実施は、授業者役、児童役の双方の立場に身を置きながら、客観的に授業を振り返る良い機会となる。学習指導案の作成から模擬授業までの一連の過程を経ることによって、指導案を作成する際には見えなかった計画段階での不備や授業改善の視点を、実際に模擬授業を実施することで、気付くことができる。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、講義と合わせて、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小学校授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の小学校の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童・生徒の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意義は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習したことを再確認することが重要である。そのため、学生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定することが必要とされる。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

手順例:計画→準備→実施→振り返り→改善→再計画……

解説:実際に授業実践の一連の流れを経験すること自体の意味は大きい。製作が伴う家庭科では、実際に模擬授業を実施することで計画段階でも、指導方法のみでなく材料や道具などの不備や改善の手立てに気づくことができる。模擬授業の有効性を担保するためにも受講学生の人数には配慮が必要である。

③講義(小集団でのディスカッションなどを含む) など

解説: 講義内容に関しては、学生が児童の具体的な姿や授業イメージと結びつけて理解するために、実際の授業で使われたワークシートや教材を例示することが望まれる。講義内容を学生自らの知識として定着させるために、講義の後に関連する質問を与えて小集団によるディスカッションを行うなどの工夫を取り入れるとよい。

【2】家庭科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における家庭科の授業実践に必要な生活を創意工夫する力と、小学校家庭科に関する背景的な知識・技能を身に付ける。

教科に関する科目は、授業実践に必要な生活を創意工夫する力と、小学校家庭科に関する背景的な知識・技能を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な生活を創意工夫する力と知識・技能」及び「小学校家庭科に関する背景的な知識・技能」の2つからなる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な生活を創意工夫する力と知識・技能

(1) 授業実践に必要な生活を創意工夫する力

小学校家庭科の授業では、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせつつ、生活の中の様々な問題の中から課題を設定し、その解決を目指して解決方法を検討し、計画を立てて実践するとともに、その結果を評価・改善するという活動の中で、多様な生活事象に係る知識・技能を身に付け、それらを活用する学習過程が求められる。

◇一般目標

小学校における家庭科の授業を担当するために必要な生活を創意工夫する資質・能力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①知識や技術の生活の中での活用

到達目標: 授業実践に必要な知識や技術を生活の中で活用する力を身に付けている。

解説: 小学校家庭科で習得を目指す日常生活に必要とされる家庭生活と家族、衣食住、消費や環境などに関する知識・技能を、既存の知識や生活体験などと関連付けて考え、学生自身の生活の場で活用できる新たな知識として価値づける活動などを取り入れる必要がある。その活動の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」や、生活課題を解決する力を身に付けることが求められている。このような学習が次の②～④の学習項目の基盤となり、具体的でふさわしい活動を構成し、多様な授業展開や探究的に主題を掘り下げていける指導能力の育成に繋がる。

②生活の中の問題の発見と、解決すべき課題についての多角的検討、および解決策の構想

到達目標:授業実践に必要な生活の中から問題を見出し、解決すべき課題について多角的に捉え、解決策を構想する力を身に付けている。

解説:児童が自分の生活の実態に基づいて問題を認識し、解決すべき課題について考え、問題を明確化することができるように、児童の状況や題材構成などに応じて異なることに留意して、適切に指導できることが必要である。そのためには学生自身が生活の中の問題を発見し、解決策を構想する力をつけることが求められる。

③より良い生活に向けての解決策の実践と、その結果の省察

到達目標:授業実践に必要なより良い生活に向けて解決策を実践し、その結果を省察する力を身に付けている。

解説:解決策の実践においては、学習した知識・技能を活用し、調理・製作などの実習や、調理、交流活動などを通して、課題の解決に向けて実践する力を育成させることが必要である。その際、知識・技能を活用することにより、なお一層の定着を図れることが求められる。そして、実践した結果を振り返り、考察したことを根拠や理由を明確にして説明できるようにすることは必要である。

④異なる他者との意見交流や、より良い生活についての考察、評価・改善

到達目標:授業実践に必要な異なる他者と意見交流し、より良い生活について考え、評価・改善する力を身に付けている。

解説:他者からの意見などを踏まえて改善策を検討するなど、計画を評価・修正し、最善の方法を判断・決定できる力を育成することが求められる。その際、他者との会話を通して考えを明確にしたり、他者と意見を共有して互いの考えを深めたり、他者と協働したりするなど、自らの考えを広げ深めることができる学習を効果的に取り入れることが必要である。

(2) 小学校家庭科に関する背景的な知識・技能

小学校家庭科においては、「家族・家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活・環境」の内容の理解は、その背景にある家政学などの諸科学の科学的な概念や知識・技能の習得によって深まる。これらの生活事象に係る知識・技能は、生涯の生活における自立の基礎を培い、日常生活に応用・発展できるもの、生活における工夫・創造につながるものとして、健康で豊かな生活をするために必要なものである。しかし、その理解には、子どもを中心とした生活を総合的にとらえることの重要性を理解させる。なお、これらの知識・技能は学校教育とは異なる文脈で発展したものであるため、養成段階では、小学校での指導に再構築することを念頭に知識・技能を身に付けていくことが肝要である。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校における家庭科の授業を担当するために必要な背景的な知識・技能を身に付ける。

◇学習項目

①生活の営みを捉える視点に関する知識

到達目標:授業実践に必要な生活の営みを捉える視点に関する知識を身に付けている。

解説:小学校家庭科で学習する「家族・家庭生活」「衣食住の生活」「消費生活・環境」の内容について、それぞれの科学的知識・技能を体系的に学ぶ視点ではなく、それらは相互にかかわりあうものであり、子どもの生活の営みを中心として捉える視点から教育内容を身に付けることが求められる。よって、授業実践に必要な知識・技能は、児童・家庭・地域・社会とのかかわりという空間的広がりという空間軸の視点と、児童のこれまでの生活からこれからの生活という時間軸の視点からとらえて理解させることが必要である。

②家族・家庭生活に関する知識・技能

到達目標:授業実践に必要な家族・家庭生活に関する知識・技能を身に付けている。

解説:「家族・家庭生活」の内容は、「自分の成長と家族・家庭生活」「家庭生活と仕事」「家族や地域の人々との関わり」「家族・家庭生活についての課題と実践」の4項目で構成されている。

「家族・家庭生活」の内容は、日常生活の課題を解決する力を養い、家庭生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育成できるようにする必要がある。なお、児童によって家族構成や家庭生活の状況が異なることから、各家庭や児童のプライバシーを尊重し、十分に配慮して一人一人の児童の実態を踏まえた適切な学習活動を行うことを理解する。

③衣食住の生活に関する知識・技能

到達目標:授業実践に必要な衣食住の生活に関する知識・技能を身に付けている。

解説:「衣食住の生活」の内容は、「食事の役割」「調理の基礎」「栄養を考えた食事」「衣服の着用と手入れ」「生活を豊かにするための布を用いた製作」「快適な住まい方」の6項目で構成されている。小・中・高等学校の内容に系統性及び学習対象の明確化を踏まえ、生活の自立の基礎として必要な衣食住に係わる基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けることができるようにすることが肝要である。特に食生活の調理実習、衣生活の被服製作等の実習では技能を伴う指導が必要であり、その技能を学生自身が着実に習得できるようにする必要がある。また、食生活、衣生活、住生活を総合的に捉え、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、健康・快適・安全で豊かな生活を営む視点から、衣食住の生活に係る課題を解決する力を養い、日常生活において実践できるように取り扱うことが重要である。

④消費生活・環境に配慮した生活に関する知識・技能

到達目標:授業実践に必要な消費生活・環境に配慮した生活に関する知識・技能を身に付けている。

解説:「消費生活・環境」の内容は、「物や金銭の使い方と買物」「環境に配慮した生活」の2項目で構成されている。課題をもって、持続可能な社会の構築に向けて身近な消費生活と環境を考え、工夫する活動を通して、消費生活・環境に関する知識及び技能を身に付け、身近な消費生活と環境についての課題を解決する力を養い、身近な消費生活と環境をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育成することが必要である。

備考

・指導においては、「授業実践に必要な生活を創意工夫する力」と「小学校家庭科に関する背景的な知識・技能」との連関を意識する必要がある。

[3]効果的な運用のための手立て

①シラバス

- ・コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。
- ・「家庭科に関する専門的事項」「家庭科の指導法」の順に履修することが望ましい。
- ・家庭科は、調理実習や被服製作等の実習の指導を伴う教科であり、知識の習得だけでなく学生自身の技能習得が不可欠であることから、その学習機会を確保するため、できれば、2単位の科目設定とすることが望ましい。

②クラスサイズと施設環境

模擬授業や実習等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。特に、実習を伴う授業については、調理や製作などの技能を獲得しやすいクラスサイズ、および施設環境の整備が必要である。

③担当教員

理論と実践のバランスの取れた専任教員の配置が不可欠である。

(9) 小学校教員養成課程 体育科コアカリキュラム解説

[1]体育科の指導法【2単位程度を想定】

【全体目標】

小学校体育科における教育目標，育成を目指す資質・能力及び指導内容について理解するとともに，児童の学習の実際や様々な学習指導方法に基づいた授業づくりの方法を身に付ける。

体育科の指導法は，小学校における体育科の学習・指導に関する知識を身に付けるとともに，授業における指導と学習評価の基礎を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な知識・理解」（「現在の小学校体育科についての知識・理解」「児童の学習の実際や特徴及び学習評価」），「授業実践」（「指導技術」「授業づくり」）の2つからなる。学習形態は，講義形式に留まることなく「授業観察」，「模擬授業」などを通して小学校の実際の体育科の授業の実態について知るとともに，教師の立場で模擬授業を行ったりすることを通して，理論に裏打ちされた実践力を身に付けることが求められる。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な知識・理解

学習指導要領を中心とした知識，児童の学習の実際や特徴，学習評価についての知識を扱う。ともに体育科の授業の土台となる知識であり，これをもとに実践力を身に付けることが重要である。小学校の体育科と併せて中・高等学校について扱うことを通して小学校の役割を明確にする。また，児童の学習の実際や特徴及び学習評価について理解を深めることが求められる。さらに，自治体や学校によって指導体制や教育課程が多様であることを理解することも必要である。

(1) 小学校体育科の教育目標や指導内容

小学校での体育科教育について，主に制度面等を扱う。教育課程での位置づけ，体育科の目標や内容，導入の経緯や変遷，主教材等，現在の体育科についての基本的な知識を身に付け，児童や学校が抱える様々なニーズへの対応の在り方を理解する。また，体育科教育において小学校が担う役割を明確に理解する。

◇一般目標

学習指導要領に示された小学校体育科の教育目標や指導内容を理解する。

◇学習項目

①小学校体育科の意義と教科観の変遷

到達目標:小学校体育科の意義と教科観の変遷を理解している。

解説:人類がこれまでの歴史の中でその知恵を生かして創造してきた様々な身体運動の中には、からだの動かし方に加え、運動そのものを楽しむ多様な様式と施設や器具・用具などの文化として価値あるものが含まれている。そして、体育科の内容であるそれらの身体運動を教え学ぶことは、児童らをより人間らしく、豊かに育てる可能性を含んでいる。また、体育科で健康や安全に関する内容を教え学ぶことは、児童らが生涯にわたって心身の健康を保持増進するうえで大きな意義を持っている。運動と保健の内容を含む小学校体育科は、1947年の教育基本法と学校教育法に基づいて成立して以後、児童らの生活や社会の変化を踏まえ、その教科についての考え方を時代とともに変えてきている。その教科についての考え方の変遷を理解したうえで、現在の小学校体育科についての考え方を理解する必要がある。

②学習指導要領

到達目標:学習指導要領がもっている教育課程の基準としての性格並びに全体構造を理解している。

解説:小学校における体育科教育は、学習指導要領改訂のたびに变化しており、この変遷を理解することの重要性は他教科等と比較して大きい。全人教育を目指す小学校における体育科教育の位置づけを理解し、併せて、体育科を通して心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する改革の大枠をとらえるため中・高等学校の学習指導要領にも触れることが肝要である。

③教育目標, 指導内容

到達目標:各校種等との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校体育科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を理解している。

解説:体育科・保健体育科を通して心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することについて各校種が担う役割を俯瞰することを通して、小学校が果たすべき役割を深く理解することが重要である。校種間の円滑な連携のためにも、教員養成の段階で小学校だけを扱うのではなく、中・高等学校の保健体育科教育についても扱う必要がある。その際、実際の授業を参観したり、映像で視聴したりできることが望ましい。これらの各校種との連携を念頭に置き、学習指導要領における小学校体育科の教育目標、育もうとする資質・能力、指導内容を理解することが必要である。

④小学校体育科の背景となっている関連諸学問や領域

到達目標:小学校体育科の背景となる関連諸学問や領域との関連の理解に基づき指導内容を構造的に理解している。

解説:小学校体育科は運動と保健の2領域で構成されている。運動領域と保健領域の背景にある、体育・スポーツ・保健に関する諸科学は、運動や保健そのものに関する学術的な成果を生み出すとともに、体育科の指導内容を理解するために必要な知見を提供している。それらの知見を理解することを通して、小学校体育科の運動領域の指導内容である運動の特性や各種運動の関連、児童の発達段階に即した指導内容の構成を理解するとともに、保健領域の内容である5つの指導内容の関連や児童の発達段階に即した指導内容の構成を理解することが必要である。

⑤社会の変化や児童の実態

到達目標:小学校体育科の内容を指導する際に留意すべき点について理解している。

解説:近年、様々な特徴を持った児童が在籍している。体育科の指導にあたっては、個々の児童の体力・運動能力や障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うことが重要である。例えば、文字指導に配慮を要する児童に対して、視聴覚教材を活用したり、ワークシートで取り組み状況が分かるよう学習を可視化したりするなど、児童の実態に合わせた指導が必要であることを理解する。習熟に時間を要する児童については、目標に到達しつつある過程を教員が適切に評価することによって、児童の更なる学習を支援して学習意欲を維持したり、目標を超えた伸長が見られる児童はその先を見通し、学習意欲を維持したりできるような個に応じた学習を行う必要があることを理解する。また、学級の人数が少ない場合は、複式学級による指導体制をとっていること等も理解し、ペア・ワークやグループ・ワークの学び合い学習やICT等の効果的な活用等の地域の実態に合わせた指導の工夫が必要であることを理解する。

(2) 児童の学習の実際や特徴及び学習評価

体育科学習の主体である児童がどのように学び、対象である体の動きや運動がどのように学び身に付けられるのか、その特徴を理解することは、指導法の根幹をなす重要な部分である。これらの知識によって、効果的な指導が可能になり、中学校以降の学習との連携がスムーズに行われることが期待される。実際の小学校の授業場面と結び付けながら授業を行い、指導法を追究する視点を持つことが求められる。

◇一般目標

小学校体育科における児童の学習の実際や特徴について理解するとともに、学習評価の在り方について理解する。

◇学習項目

①児童の発達や学習

到達目標:小学校体育科における児童の学習の実際や特徴を理解している。

解説:小学校学習指導要領の運動領域においては、内容の構成が基本的に、低・中・高学年の三段階で示されている。低学年の児童は走る・跳ぶ・這う・よじ登るといった基本的運動能力の発達が著しく、逆さ感覚、回転感覚という体位の変換に伴う感覚も急激な伸びを示す。ただし注意の持続時間は短く、自己中心的傾向も強い。中学年の児童は、全身的巧緻性の発達が著しい。ただし、発育発達の早い女子は思春期特有の不安定傾向を示す。だんだんと注意の集中力もつくので、活動欲求から課題達成欲求に基づく活動が見られるようになる。小集団としての行動も可能となる。高学年では、大部分の女子や発育の早い男子の児童に第2次性徴が発現し始め、急激な体格の向上とともに、筋力、持久力の発達が著しいが、女子には運動機能の低下などの現象が示される場合もある。体格の向上とともに自立心が旺盛となり、自己の行動に対する責任感や計画性が身に付く。また、他人に認められたり他の者より優れた成績を示したりすることに関心を持つようになる。これらの低・中・高学年の児童の発達の特徴を踏まえて各種の運動と健康・安全に関して指導をする必要があることを理解する。

②学習評価

到達目標:小学校体育科における評価の観点、学習評価の在り方について理解している。

解説:小学校体育科における評価について、なぜ評価するのか、何を評価するか、どのように評価するのかについて基礎的な知識を理解するとともに指導と評価の一体化等について学ぶ。体育科の評価は学習状況を総括的に捉える「評定」と、分析的に捉える「観点別学習状況」評価として実施される。「観点別学習状況」評価は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価を実施する。3観点は、体育科の資質・能力として示された「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力・人間性等」に対応している。その際、「学びに向かう力、人間性等」に示された資質・能力には、感性や思いやりなど幅広いものが含まれるが、これらは観点別学習状況の評価になじむものではないことから、評価の観点としては学校教育法に示された「主体的に学習に取り組む態度」として設定し、感性や思いやり等については「観点別学習状況」の評価の対象外とする必要があることを理解する。

③個々の児童の理解と対応(他教科等との関連を含む)

到達目標:児童理解に基づく適切な対応の仕方(他教科等との関連を含む)について理解している。

解説:各種の運動の指導においては、男女や各個人の体格差や体力差、運動技能の差に対して十分注意を払い、必要に応じて学習の課題を変えたり、ゲームのルールを変えたりするなどの配慮が必要である。特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童、障害のある児童への指導等の在り方について配慮する。健康・安全に関する基本的な知識と技能の指導においては、具体的な身の回りの経験を中心に思考する中学年と、仮説を立てて推論するような論理的な思考を用い始める高学年の思考の相違に留意しながら指導する必要があることを理解する。また、低学年においては幼稚園教育要領に示された内容や他教科等との関連をもって指導する必要性を理解するとともに、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導や弾力的な時間割の設定を行う必要性を理解する。

2. 授業実践

児童期にふさわしい体育科の授業を実施するための、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を中心とした基本的な指導技術を身に付けるとともに、授業を計画・実施・改善するために必要な要素である教材・指導計画・指導体制・指導の手立て・ICT等の活用・学習評価について基本的な内容を学習し、実際に学習指導案を作成する。「授業に必要な知識・理解」と「技能」とは車の両輪の役割を果たし、指導力の土台となる。それぞれの学習項目について、運動領域と保健領域の両方等に対応できる指導力に寄与するよう、指導を工夫することが求められる。

(1) 指導技術

課題把握、課題追及、課題解決、新たな課題へと進むプロセスを実践する指導技術を身に付ける。運動の示範や映像などをもとにした児童相互の集団思考による運動課題や資料提示による健康課題の引き出し方、運動の練習と運動の観察による運動課題の解決への導き方、調べ学習による健康課題の解決への導き方を扱う。このような学習過程に即した課題解決的な学習は、小・中・高等学校を通じた体育科、保健体育科の基盤をなす部分であり、良質の教材の使用を含めた指導力を確実に身に付けることが求め

られる。

◇一般目標

実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。

◇学習項目

①ICT

到達目標:小学校体育科の特徴に応じて ICT を適切に活用することができる。

解説:課題解決的な学習過程のどの段階においても、インターネットやタブレット端末などの ICT 機器を用いて提示する運動の示範や映像、提示する資料の工夫などを通して、児童に分かりやすく学習内容や学習方法を伝えながら、授業が展開していくことが重要である。例えば、タブレット端末などを用いて運動の示範や映像を提示する課題把握の場面では教師が運動の観察視点をしばらくこんで提示し、発問を通して運動の経過の特徴に気付いた児童に発言させる集団思考場面を組織し、児童が自ら運動の行い方を理解するように授業を展開することが求められる。小学校体育科と ICT は親和性がますます強まる可能性が高く、すでに文部科学省から YouTube に配信されている各種の運動の動画教材など日常的に活用されている教材も多い。ICT 教材には、保健の教科書や示範や説明による運動課題の提示の質と量を補ったり、動画映像による運動経過のイメージを児童にもたせたりする役割が期待される。タブレット端末などを用いて児童相互が運動経過を撮影し合い視聴し合うことで、運動のつまずきやポイントに気付かせるといった活用も行われていることを理解し、指導に生かすことを学ぶ必要がある。

②コミュニケーション技法

到達目標:児童の発達や学習状況に応じた適切な表現を用い、対話することができる。

解説:体育科の運動領域であれば、課題を解決しようとしている児童の運動経過のつまずきの部位を外部からの観察によるモデルからのズレにより見取って、その児童に伝える。さらに、運動が得意な児童の運動経過のイメージを聞き出して他の児童と交流させ、つまずいている児童に運動経過のイメージを持たせて運動を練習させるような児童相互及び教師と児童とのやり取りを進めることが大切である。保健領域であれば、例えば病気の予防について、生活の中で児童が保持している病気の原因と予防についての知識を発表させて交流するとともに、提示した資料から読み取れる病気の原因と予防の知識について発問し児童に読み取らせて発表させる。つまり、生活の中でこれまで児童が持っていた知識と資料から読み取れる科学的な知識を対比させ、健康課題の解決に有効な知識と方法を児童に理解させることが必要である。

③学習集団の組織

到達目標:小学校体育科の学習の特徴に応じた適切な学習集団を組織することができる

解説:体育科の運動領域であれば、児童の個人差を踏まえたうえで共通に学習できる運動課題を設定し、運動が得意な児童と苦手な児童の双方の運動経過を観察させ、その相違を発表させることにより、児童自身に各自の解決すべき運動課題を理解させるようなやり取りを進める必要がある。その際、運動の苦手な児童が失敗を恐れず他の児童の前で練習できるような、受容的な風土を持つ児童らの集団の育成が

大切である。保健領域であれば、例えば病気の予防について、教師が課題を提示するのではなく、提示した資料から読み取れる病気の原因と予防の知識について発問し、児童に読み取らせて発表させるような児童とのやり取りを進めることが大切である。その際、知識の理解に時間のかかる児童が間違いを恐れず他の児童の前で発表できるような、受容的な風土を持つ集団の育成が大切である。

④学習活動の構成(練習・示範・観察・話し合い等)

到達目標:小学校体育科の学習の特徴に応じた適切な学習活動を構成することができる。

解説:体育科の運動領域であれば、児童はそれまでの運動経験や発育の程度により、運動の行い方の理解、運動実施への意欲や運動技能の達成度に大きな個人差がある。そのような個人差を踏まえたうえで共通に学習できる運動課題を設定し、運動が得意な児童に示範をさせてその運動の成功のポイントを発見させ交流させことで課題となる知識や技能を理解させる。また練習場面では、運動が得意な児童と苦手な児童の運動経過の相違について観察を通して、運動課題の理解を言葉で話し合う協働的な学習活動を指導する。そうした協働的な学習を通して、運動が得意な児童と苦手な児童の双方の運動への思いや理解を引き出す課題解決的な授業が求められる。保健領域であれば、課題解決の解答は必ずしもひとつではなく多様な可能性があることを説明し、さまざまな意見や質問を発言しやすい雰囲気をつくり出す。そして、課題の解決について授業の中で出された質問や意見について、他の児童の同じ意見や異なった意見を交流させる時間や教具を準備して話し合わせ、課題の解決に向かって児童らが対話する学習を促すことが必要である。

(2) 授業づくり

体育科の目標や内容を深く理解し、主教材を使用した授業を実施できることが求められている。実際に学習指導案を作成する際には、適切な単元目標を設定した上で、単元を構成する各授業を計画することが必要である。また、実技と理論学習を関連させた指導や体育科特有の運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動の指導も行えるよう理解を深めなければならない。

◇一般目標

小学校体育科における基本的な指導方法を理解し、授業づくりの方法を身に付ける。

◇学習項目

①教材研究

到達目標:小学校体育科の目的に応じた教材研究ができる。

解説:授業で目標とする課題解決的な学習が、意味を伴って児童が取り組めるよう教材を適切に選定することが重要であること、またそのためには児童の興味・関心や日常生活・他教科等の学習内容などについて深い理解が不可欠であることを理解する。また、授業において児童の理解を助け、活発なやり取りを引き出すために保健の教科書や運動教材の場づくりが果たす役割は大きい。特に運動教材の場づくりを計画する際には、構造的特性や機能的特性という運動の特性を保持しながらも児童一人一人の特性からみて適切な場づくりかどうかを見抜く力が必要である。保健の教科書とともに文部科学省作成による各種の運動の「学校体育実技指導資料」や「小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック」、「YouTube

デジタル教材」に掲載の教材は長期にわたって使用されることが想定される。今後、受講する学生が教員として採用された後、使用することが想定される教材について、その趣旨・構成・特徴等を扱うことが必要である。

②指導計画(学習指導案等)

到達目標:学習到達目標に基づいた指導計画について理解し、学習指導案を作成することができる。

解説:学習到達目標に基づいた年間指導計画・単元計画について扱いつつながら、学習指導案作成を含む1時間の授業づくりの実際を経験する。児童の実態に合わせて適切な単元目標を設定することの重要性を理解し、その上で単元計画を立てることが必要である。また、1時間の授業を構成する様々な活動に実際にふれながら、ある程度レパートリーを増やす。活動を考える際は、ねらいに沿って段階を踏んだ活動内容を工夫することが必要である。

③授業改善

到達目標:模擬授業の実施とその反省を通して、授業改善の視点を身に付けている。

解説:実際に授業実践の一連の流れを経験すること自体の意味が大きい。体育科に苦手意識を持っている学生にとっては、模擬授業の中で簡単な運動の実技を指導するだけでも大きな挑戦となることがある。実際に模擬授業を実施することで計画段階でも不備や改善の手立てに気づくことができる。特に小学校体育科の運動領域の指導では、教室での授業とは異なり、ホワイトボードや体育用具、画板等の教材や教具をすべて授業ごとに運動場や体育館等に教師が準備する必要がある。また、運動場や体育館等の開放的な場面で多くの児童を集合させたり移動させたりするための指示や説明、運動の示範や運動の良し悪しを観察し評価するという他の教科とは異なる運動指導に特有の教授技術が必要となる。このような授業の改善に必要な視点を教師役や生徒役等の体験を通して身に付けることが必要である。さらに、授業を計画して実施し、観察をもとに反省するという一連の授業改善の方法を身につけることも必要である。模擬授業の有効性を担保するためにも受講者の人数には配慮が必要である。

【学習形態】

上記の内容を学習する過程においては、教員の講義に留まることなく、以下の学習形態を必ず盛り込むこととする。

①授業観察:小学校授業映像の視聴や授業の参観

解説:実際の授業を参観したり映像で視聴したりすることによって、教員の働きかけ方や思いもかけない児童の反応など、実際の授業場面の機微に触れることの意味は大きい。児童の学び方について学ぶことと相互補完的に授業場面を通して学習した授業づくりの要点を再確認することが肝要である。そのためには、授業担当者は学生が参観する授業や視聴する映像を適切に選定できる力が必要である。

②模擬授業:1単位時間(45分)の授業あるいは特定の活動を取り出した模擬授業

解説:実際に授業実践の一連の流れを経験すること自体の意味が大きい。特に実技を伴う運動課題に苦手意識を持っている学生にとっては、模擬授業の中で体育用具を自分で準備し、簡単な運動課題を説明し

指示するだけでも大きな挑戦となることがある。そのような学生にとっても模擬授業は大きな意味を持つ。また保健の授業では教科書にとどまらず、教材を自分たちで作りに出す経験が大切である。実際に模擬授業を実施することで計画段階での不備や改善の手立てに気づくことができる。模擬授業の有効性を担保するためにも受講者の人数には配慮が必要である。

③講義(小集団でのディスカッションなどを含む)など

解説: 多人数の講義においても、小集団をつくり、小集団ごとに課題を与えて対話させ、小集団の代表に全体の前で発表させる活動を組織する。そのことにより、受講生全員の能動的で主体的な授業への参加を促すとともに、講義内容の課題への深い思考を求めることが必要である。

[2]体育科に関する専門的事項【1単位程度を想定】

【全体目標】

小学校における体育科の授業実践に必要な、心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する能力と、各種の運動と健康・安全に関する背景的な知識と技能を身に付ける。

教科に関する科目は、授業実践に必要な基本的な心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を、十分に育成できる力を身に付けること、そのために各種の運動と健康・安全に関する背景的な知識を身に付けることを目標とする。学習内容は「授業実践に必要な心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」及び「各種の運動と健康・安全に関する背景的な知識」の2つからなる。各種の運動と健康・安全に関する背景的な知識を土台に、小学校での授業実践を意識した心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の習得育成を目指すことが重要である。また、本科目の受講だけで心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を身に付けるのは難しいため、教職課程を履修する学生を対象とした「スポーツ実習」「健康スポーツ科学」などの教養教育科目の中でも、心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力と各種の運動と健康・安全に関する背景的な知識と技能などを積極的に扱う必要がある。

【学習内容】

1. 授業実践に必要な心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する力と各種の運動と健康・安全に関する知識と技能

(1) 授業実践に必要な心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する力

質の高い教育内容に即して、体育科授業の中で意味のあるやり取りをするためには、授業で必要な心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する力が不可欠である。

◇一般目標

小学校における体育科の授業を担当するために必要な、心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフ

フを実現するための資質・能力を育成する力を、授業場面を意識しながら身に付ける。

◇学習項目

①各領域の運動の特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全についての知識

到達目標:授業実践に必要な各領域の運動の特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解する力を育成する力を身に付けている。

解説:各領域の運動の特性に応じた各種の運動（体づくり運動系、器械運動系、陸上運動系、水泳運動系、ボール運動系、表現運動系等）の行い方について、器械運動系等のポイントを押さえた動き方やボール運動系等の「もし敵や味方がこう動けば、そのとき私はこう動く」という動き方等の手続きの知識、ボール運動のゲームのルールやポジションの役割等の事実や概念を理解する必要がある。また、身近な生活における健康・安全については、健康な生活、体の発育・発達、心の健康、けがの防止、病気の予防等について、それぞれの内容に関する基礎的な知識を身に付ける必要がある。

②各領域の運動の特性に応じた各種の運動の基本的な動きや技能

到達目標:授業実践に必要な各領域の運動の特性に応じた各種の運動の基本的な動きや技能を育成する力を身に付けている。

解説:各領域の運動の特性に応じた各種の運動（体づくり運動系、器械運動系、陸上運動系、水泳運動系、ボール運動系、表現運動系等）の基本的な動きや技能については、低・中・高学年の発達段階に即して、それぞれの運動領域ごとに特徴のある基礎的な運動技能を身に付ける必要がある。身近な生活における健康・安全に関する技能については、心の健康やけがの防止等の内容について不安への対処やけがの手当て等の技能を身に付けることが必要である。

③運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力

到達目標:授業実践に必要な運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を育成する力を身に付けている。

解説:運動の自己の課題を見付けるためには、ペアや小グループで一緒に運動を実施して互いの運動経過を観察し、運動のポイントについて互いに指摘したり、自己の運動経過についてICT機器を活用し録画して視聴したりする方法を身に付ける必要がある。そして、運動課題の解決のために適切な練習方法を工夫して、自己の運動の修正について思考、判断しながら練習する。そのペアや小グループで一緒に練習する過程で、運動のポイントやコツを他者に伝える力を身に付ける必要がある。健康については、それぞれの内容に即して家庭や学校の生活の中で自己の課題を見付け、その解決に必要な方法について資料を用いて思考し判断するとともに、発表活動等を通して他者に伝える力を身に付ける必要がある。

④運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度

到達目標:授業実践に必要な運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を育成する力を身に付けている。

解説:それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わうとともに、公正に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たす、仲間の考えや取組を認める、安全に留意するなどの態度を

育む必要がある。そして、自己の健康に関心をもち、自己の健康に関する取組のよさを認める、自己の健康の保持増進や回復等のために主体的、協働的に活動する等の態度を育成し、健康の保持増進を行う必要がある。さらに、各種の運動を適切に行うことにより、その結果として体力の向上を図ることができるようになる必要がある。これらの力を身に付けることにより、現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた楽しく明るいものにすることが必要である。

(2) 各種の運動と健康・安全に関する知識及び技能

体育科の授業を下支えする各種の運動と健康・安全に関する背景的な知識と技能として、各種の運動に関する基本的な知識、健康・安全に関する基本的な知識、各種の運動に関する基本的な技能、健康・安全に関する基本的な技能を扱う。これらは体育科の授業づくりに密接に関わるものであり、その知識を得ることは自信を持って授業を行うことを可能にする。これらの知識を小・中学校の接続も踏まえながら養成段階から十分に身に付けておくことが肝要である。

◇一般目標

幼・小・中学校の接続を踏まえながら、小学校における体育科の授業を担当するために必要な知識と技能を身に付ける。

◇学習項目

①低学年における各種の運動に関する基本的な知識及び動き(体づくりの運動遊び、器械・器具を使つての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊び等)

到達目標:低学年における各種の運動に関する基本的な知識及び動き(体づくりの運動遊び、器械・器具を使つての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊び等)について理解し身に付けている。

解説:低学年における各種の運動(体づくりの運動遊び、器械・器具を使つての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊び等)に関する基本的な知識について、その特性に応じた行い方について理解するとともに、各種の基本的な動きを、解決すべき課題と関連付けながら、体験することが重要である。これら各種の運動遊びは、楽しみ方や解決すべき課題やその解決方法が異なる。そのため、各種の運動で得られる楽しさや喜び、そこで解決すべき課題、それらの解決方法に応じた行い方を理解することが大切である。

②中・高学年における各種の運動に関する基本的な知識及び動きや技能(体づくり運動、器械運動、走・跳の運動及び陸上運動、水泳運動、ゲームとボール運動、表現運動等)

到達目標:中・高学年における各種の運動に関する基本的な知識及び動きや技能(体づくり運動、器械運動、走・跳の運動及び陸上運動、水泳運動、ゲームとボール運動、表現運動等)について理解し身に付けている。

解説:中・高学年における各種の運動(体づくり運動、器械運動、走・跳の運動及び陸上運動、水泳運動、ゲーム及びボール運動、表現運動等)に関する基本的な知識について、その特性に応じた行い方について理解するとともに、各種の運動の基本的な動きや技能を、解決すべき課題と関連付けながら、確実に

身に付けることが重要である。これら各種の運動は、楽しみ方や解決すべき課題やその解決方法が異なる。そのため、各種の運動で得られる楽しさや喜び、そこで解決すべき課題、それらの解決方法に応じた行い方を理解することが大切である。

③健康・安全に関する基本的な知識及び技能(健康な生活, 体の発育・発達, 心の健康等)

到達目標:健康・安全に関する基本的な知識及び技能(健康な生活, 体の発育・発達, 心の健康等)について理解し身に付けている。

解説:健康な生活, 体の発育・発達, 心の健康等についての基礎的・基本的な内容を実践的に理解することが重要である。またこれらの理解は、単に知識を記憶としてとどめるだけではなく、児童が、身近な生活における学習課題を見付け、それを解決する過程を通して、健康に関する課題解決に役立つ保健領域の主要な概念を習得することを目指すことが大切である。

④健康・安全に関する基本的な知識及び技能(けがの防止, 病気の予防等)

到達目標:健康・安全に関する基本的な知識及び技能(けがの防止, 病気の予防等)について理解し身に付けている。

解説:けがの防止, 病気の予防等について、基礎的・基本的な内容を実践的に理解することが重要である。またこれらの理解は、単に知識を記憶としてとどめるだけではなく、児童が、身近な生活における学習課題を見付け、それを解決する過程を通して、健康に関する課題解決に役立つ保健領域の主要な概念を習得することを目指すことが大切である。同時に、心の健康, けがの防止等について、不安への対処やけがの手当て等の基本的な技能を身に付けることが必要である。

[3]効果的な運用のための手立て

①シラバス

コアカリキュラムで提示された学習項目は、それぞれを1回の授業で扱うのではなく、授業全体の中で適宜学習するものである。シラバス作成に当たっては複数の学習項目を1回の授業で扱ったり、受講生の実態に合わせて、ある学習項目に重点を置いたりするなど、各大学で検討・工夫することが望ましい。特に教科に関する科目においては、授業を行うのに必要な知識や技能を身に付けることが最重要視されることが期待される。

②クラスサイズ

模擬授業等が有効に行われるには、クラスサイズについての配慮が必要である。この点については各大学で検討することが望ましい。

③担当教員

理論と実践のバランスの取れた教員の配置が不可欠であり、各大学で検討することが望ましい。